エールホームクリニック
AILE HOME CLINIC

AILE

Vol.06　2023.9

米百俵プレイス
ミライエ長岡
MIRAIE NAGAOKA

Meet Your Future

「米百俵」の精神が息づくこの場所で
人に出会う、仕事に出会う、学びに出会う、文化に出会う、未来の自分に出会う
たくさんの出会いをチカラに、新しいイノベーションを起こそう
ここは未来への懸け橋
ひとりひとりの想いは長岡の“ミライエ”つながっていく

MESSAGE

澁谷 裕之（しぶや ひろゆき）

内科医師／医療法人メディカルビットバレー 理事長

新潟県長岡市生まれ。弘前大学医学部卒業。米沢市立病院、秋田厚生医療センターなどを経て長岡赤十字病院で総合診療医として研鑽を積み、総合診療科副部長を歴任。2020年4月に医療法人メディカルビットバレーを設立。家庭医療専門医、プライマリケア認定医。
好きな言葉は「即断即決即実行」、「適材適所」

ノウハウの問い合わせがあり、僕が出向くこともあります。
MBVがなぜここまで成長できたのか。それは医療と経営を分離し、それぞれが役割と責任を果たしながら、一体感を持って進んできたからです。創業当初から経営専門メンバーがいますし、現在は地元銀行からの出向者と共に経営能力を高めています。優れた医師やスタッフが全国から入職を希望してくれますので、少数精鋭を貫きながら、医療サービスの質も確保できています。

医師としての優秀さと、組織経営者としての能力は全く別。それなのに日本では医療組織のトップのほとんどが医師です。その地域に特別な事情がない限り、日本の保険制度で赤字を連発し、次々とスタッフが去るような医療組織は、トップに経営の才覚がないということ。コロナ禍でより顕著になりましたが、「社会性の強い医療は特別。医療機関は赤字でいい。お医者さまは別格」という時代ではなくなってきています。

組織の全体像を把握し、将来を見通して経営するには、様々な問題解決をしてきた一線のビジネスマン感覚が必須なのに、たいていの医師はビジネスの勉強をしていませんし、経験もない。医師だけでは経営がうまくいかないという事実を素直に受け入れ、心を開いて、ビジネスのプロフェッショナルとコンビを組めばいいだけの話です。「医療組織では医師が一番偉い」というプライドが、結果として自分たちも組織も損をさせている。もったいないことです。

「外部の経営コンサルに依頼すればいい」と考えるかもしれませんが、他人事として業績を見るだけのコンサルなど意味がありません。メンバーになって一緒に汗を流し、苦楽を共にする覚悟のある人間でなければ無理。MBVはマネジメント人材リクルートをしていますが、あえて医療系未経験者を募集しています。医療界の前例や固定観念、悪しき慣習に囚われず、MBVの今現在を見極め、これからの世の中の動きを予測して経営に携わってほしいからです。必要な医療の知識など入職してもらえば優秀な人は自分で学びますから、全く問題はありません。

医療組織だからこそ、健全な組織経営で、保険診療だけでも黒字を目指すべきです。世の中は刻々と変わっています。医師免許を取得したらその後50年心配なく暮らしていける時代じゃない。赤字で病院やクリニックの閉院もあり得るし、承継問題など課題は山積みです。時代の変化のスピードに遅れずに、より質の高い医療の提供を目指すなら、医師やスタッフが経済的に安定し、気持ちよく働ける組織作りが肝心です。

MBVの実績を見ていただければ、病床のない地方のクリニックがコロナ禍という非常時であっても社会ニーズに応えられることは明らか。今後は病院の外来がスリム化され、医療の最前線にいるクリニックはますます重要になり、価値を増します。地域医療にも大きく貢献できるMBVの概念、ノウハウを導入すれば、新規開業だけでなく既存の医療機関もどんどん良い方向に変わる。諦めずに一歩踏み出すことが大事です。

良いクリニックが街にあれば、その街は元気になります。地域の価値が上がったり、いろいろな分野と結びついて新しいプロジェクトが始まったり。医師やクリニックは、病気やけがを治す以外にも多くのことができる。その可能性をぜひ知っていただきたいのです。
新潟は医師不足が深刻です。だからこそ、新潟を起点に効率的に医療の質を上げていく。そうした新しい医療システムを新潟から広げたいのです。そして「新潟はあたらしい！」と言われる未来に貢献したいと思っています。

求める人材は“有能で、いいやつ”

ぜひ多くの応募をお待ちしています。選考基準は「有能であるか」そして「人間的に“いいやつ”か」です。“いいやつ”ってフワッとしてますが、何となく分かりますよね（笑）。MBVは年齢、キャリア、職種の垣根がなく、フェアでフラットな職場です。医師も、看護師も、検査技師も、事務や運営のスタッフも、みな優秀で素晴らしい人材。最高の笑顔で働き、それぞれ個性を持つスタッフが同じ気持ちでつながっているチームです。

医療システムを変え、医療の質を上げていく。このビジョンに共感してくれる方や「最高の笑顔で働きたい！」という方との出会いを、心から楽しみにしています。

第1回「医療と経営の分離」

心を開けば楽になる

MBVは、ほぼ保険診療だけで黒字経営を維持し、今も成長しています。全国から集まった医師やスタッフ同士のチームワークも良く、それぞれがプライベートの充実とやりがいのある仕事のバランスを取って生き生きと働いていており、通院患者さんは1日400人以上になりました。
一方で「エールワクチンセンター」も開設し、現時点では医師2人、受付4人、看護師3人で1日約1000人に接種。世の中のニーズにここまで応えられていることが注目され、全国の医療機関や自治体から

僕がメディカルビットバレーを創った理由

僕がここ新潟県長岡市に医療法人メディカルビットバレー（以下MBV）を創った目的は、ひとことで言うならば従来的な医療システムを変革すること。そして医師不足といわれる地方により良い医療を届けることです。医療の組織において重要なのは時代にあったマネジメントとリーダーシップ。しかし医師の世界はとても閉鎖的で、大きな病院ほどそれが機能していない現実を目の当たりにしました。今必要なマネジメントとリーダーシップを機能させ、まったく新しい医療組織やシステムを創りたい。そして「医療」と「経営」を役割分担し、互いに尊重し合って最高のパフォーマンスを発揮できる場を創りたい。その考えに共感してくれた、多くの仲間と共にMBVスタート。2020年にエールホームクリニックを開業しました。

しかし開業とほぼ同時に新型コロナウイルスが拡大。僕たちはそのとき、最も必要とされたワクチン接種を集中的に行い、街のクリニックとしては超異例の15万回以上の接種を行いました。ワクチンをきっかけに当院を知ってくださった患者さんも急増し、開業後数ヶ月は1日平均1桁だった患者さんが、今では1日400人以上ご来院いただいています。またWEBサイトの閲覧数は、多い時で1週間に約10万ページビュー。半数以上が県外からのアクセスなので、診療情報だけではなく「考え方」の部分にもご注目いただいているのかなと思います。

新潟からはじめるメディカルレボリューション

MBVが広く認知された今、僕たちがやろうとしているのは「全国医師リクルート」です。といっても目的は全国から長岡に多くの医師を集めることではありません。むしろその逆で、MBVを一緒に進化・成長させながら、その経験やノウハウをそれぞれの地域に持ち帰り、医療のより良い「あかり」を全国に灯してもらいたいのです。とは言っても新潟でずっとも、やっぱりうれしいなぁ（笑）

こういった取り組みをしていると、ドンドン事業を進めるタイプだと思われるのですが、僕は自他ともに認める大のカイゼン好き。違和感を感じたら即行動。すべてはその積み重ねです。

医療法人 メディカルビットバレー

理事長・医師
澁谷 裕之氏

新しい医療システムで持続的な地域貢献を

―今年の秋に「長岡米百俵プレイス」で「エールホームクリニック長岡」を開院されます。

2020年に開院した「エールホームクリニック」で培ったノウハウを活用していきます。コロナウイルス禍でも1日平均400人以上という多くの患者さまが通院してくださるまでになった経験は私たちの財産。同じ志を持つ二つのクリニックでチームを組み、医療による持続的な地域貢献を続けていきます。

―「新しい医療システム」について教えてください。

医療と経営を分離し、医療側と経営側が信頼して融合することで便利で質の高い医療を提供。地方都市にあって、創業2年でほぼ保険診療だけで黒字化している点が注目されています。

元々病院と一般診療所は提供できる医療の質に差があり過ぎました。病院と診療所の間に、より高度な医療を提供する新しいシステムを構築したのが「エールホームクリニック」です。

院内のスタッフ同士だけでなく、他の診療所や病院、金融機関や業者の皆さんとも壁のない関係を築いています。患者さまにとって便利なだけでなく、地域医療のボトムアップになり、病院の高度化、専門化にも役立ちます。地域医療の疲弊が指摘されている地方都市に大型複合クリニックをつくることは、今後極めて有用になるでしょう。私たちの知的財産であるノウハウに、大型複合クリニック開設に必要な他の機能を組み合わせた医療システムを全国各地に広げていくために、医療から始まったベンチャーとして既存の医療法人の枠組みを超える必要があります。多くの医師や医療スタッフが切磋琢磨しながら楽しく仕事することで、新しい価値を生み出す究極の医療DXを目指します。

―新潟は医師不足が深刻です。

当法人は全国から医師を募集しています。病院で高度医療に携わってきた医師も、引き続き同レベルの環境ですからやりがいも大きい。そして、上も空いている。子育てのため病院勤務が難しく、第一線から離れていた女性医師も、希望する時間で働けます。モチベーションを上げながら楽しく仕事ができる環境があれば、アンテナが立っている有能な人は集まってきますよ。

―新潟の元気に必要なことは。

斜に構えずみんなと仲良くすることじゃないでしょうか。本音を話せる環境が人と社会を元気にする。進化し続けたい人たちは常に周囲にアンテナを立てておりオープンです。既存の価値観にとらわれず、何事にも心を開くことが肝心だと思いますよ。

新潟日報社リーダーズ倶楽部
2023年4月25日掲載

メディカルレボリューション
MEDICAL REVOLUTION

修や見学に来てくれる若い医師たちがいますが、数年常勤してMBVの医療と経営の全体像を学んでほしいですね。

第3回「未来への提言」

地方医療こそチャンス

日本の医療は専門化が進み細分化されました。それは医療の進化であり、素晴らしいこと。スペシャリストたちの能力を最大限引き出すには、社会の中で医療がどのような立ち位置にあるのか、全体の状況を見て判断できる大局観を持ったリーダーが必要です。しかし、日本の医療界は俯瞰的に物事を見られる教育をしていません。むしろ、大局観のある人や、若い人の新しい考えを拒絶する閉鎖性がある。とても残念なことだと感じています。

医療は誰もが必要とするインフラ的要素が強いことは事実ですが、特別な存在ではなく、社会システムの一つであると認めることで、もっと自由な動きができる。これからの医療には、稼働しながら成長する、人もサービスも循環しながら底上げするビジネスの感覚が不可欠です。その場限りではなく未来まで見据える大局観を持った医師を育てるのがMBV最大の使命だと思っていますし、今後10年間は力を注いでいきます。

新型コロナ禍は病院や既存のクリニックとは違う役割を担う、新しい形の医療機関の必要性を顕著にしました。同じ志を持ったMBVのメンバーがチームワークすることでシナジー効果が高まり、巨大なパワーを生んだ結果は、ワクチン接種実績や業績アップの数字が証明しています。時代に即した新しい人的医療システムを創れる有能なビジネスパーソンと医師の協働で、地方のクリニックでも医療の質を高めながら、安定した経営ができることが明確になったのです。新型コロナ収束後もこの新しい価値観は広がり続けるでしょう。

地方医療は疲弊していると言われていますが、まだまだエネルギーが眠っています。創業以来、MBVの概念や方針について、さまざまな所から出る杭を打たれまくったことで逆に実感しました。今まで変化を嫌ってきた分、これからもっと良い方向に劇的に転換する力が蓄積している。大チャンスが地方医療にはあるんです。今後は医療界も切磋琢磨が当たり前になり、それが地域全体の活性化につながる。未来の医療に時代遅れの慣習としがらみは要りません。

僕は自分が働きたい場所としてMBVを創りました。医療と経営を分離し、メンバー全員が一体感を持って働きやすい環境での経営黒字化。法人の役員に創業者である自分の血縁を入れず、年功序列や男女格差のない、頑張ればいくらでも上を目指せる実力主義の組織構築。志を同じくする少数精鋭のメンバー同士がフラットな立場で支え合い、自己成長できる人事体制。一時的な金儲けではなく長くしっかり続けられるよう、中心に据えるのは保険診療。このような価値観は若く柔軟な頭でないと理解できません。僕自身は、いつまでも創業者パワーに頼って後継者が育たない環境を避けるよう、理事長としての活動期限を決め、常に後継育成を心がけています。

5年後、10年後の具体的な姿は分かりませんが、MBVが起こした新たな概念が波及することは確信しています。一生懸命に仕事をする人が報われ、若い世代が地域も国も良くすることができると、誰もが関心のある医療から発信していく。MBVの進化は続きます。

第2回「リーダーシップとマネジメント」

人間力はあるか？

医療組織のリーダーには、細部に配慮しつつも全体を把握する力と、将来まで見通せる広い視野が必要です。危機察知能力とデリケートな気質を持ちながらも、スタッフに安心して業務に集中してもらうため、自らの繊細さを前面に出さない技術も大切。医療は感情のある人間相手の仕事ですから、ストレスが非常に高い。本来の仕事以外でスタッフに余計な負荷をかけないよう、リーダーは注意しなくてはなりません。感情コントロールも当然。命にかかわる現場で、すぐ冷静さを失う人はリーダーにも医療にも向いていないですね。

リーダーシップは本来、医療組織の全員が持つべきもの。自分の仕事に責任を持つ「個」のレベルから、部署などグループのリーダー、やがては組織のトップレベルまでと段階はいろいろですが、真のリーダーに必要なのは人間力。見定めたゴールに向かって問題解決をすべく考え抜いて実行し、事実を事実として認め、結果の責任を取る。要は「人のせいにしない」ってことです。そして部下の何倍も働ける心身の資質。組織内の誰よりも働くことができないならトップの資格はありません。

医師はもともと優秀な人たちですから、リーダーシップを潜在能力として持っている。ただ既存の医療組織内で発揮できることはほとんどないし、仕事はトップと上司で決まるので、そこに恵まれなければ力を発揮することなどできません。僕は基本的に、信頼しているスタッフのリーダーシップに任せるタイプ。スタッフが忙しくとも楽しく仕事をしていれば自然に医療の質が上がり経営は黒字になる。地方であっても自然と人が集まるんですよ。今までのMBVを見ていただければ分かることです。

マネジメントの根幹は一生懸命働く人の雇用を守ること、そしてハッピーにすること。医師や医療スタッフが幸せでなくて、どうやって患者さんを幸せにできるんですか？　公私共に安定しているからこそ心身に余裕や余白が生まれ、好奇心を持って新しいことにチャレンジしようという気持ちになれる。挑戦の結果で得た気付きや学びが仕事に生きて、ますます幸せになり余裕と余白が新たに生まれ、次の興味が湧く。プラスのスパイラルで少しずつ人も組織も成長できるんです。

社風に合ったメンバーをリクルートすることも肝心です。うちは全員がオープンマインドで明るく、スピード感を持って物事に対処できる。機動力が高く変化に強いメンバーばかりです。そういう人に入職してもらっていますし、社風に合わない人は自然淘汰されていく。創業当初から、問題は小さなうちに見つけ出し、現場ですぐ対応するよう教えてきたので、今では「カイゼン文化」が根付いています。また、組織が大きくなってもむやみに人を増やさない。少数精鋭を徹底しています。

リーダーシップとマネジメントの力は、若いうちから身に付けた方がいい。MBVの概念を若いうちに理解できた医師は大成功しますよ。旧来の伝統通りの決められたレールに乗って10年、20年と過ごすうちに柔軟さや行動力、向上心もなくなってしまうので、MBVの存在に先見性のある若い医師が気付くことを願っています。現在も研

メディカルビットバレーの医師たちに、自身の想いや伝えたい医療のハナシを聞きました！

INTERVIEW

楽しく働けて人の役に立てる!

内科医師 **倉科 健司** くらしな けんじ

【経歴】
長野県松本市生まれ
新潟大学医学部卒業
新潟県厚生連佐渡総合病院、新潟県立中央病院、長岡赤十字病院、新潟大学医歯学総合病院、立川綜合病院にて研鑽を積む。

【専門医・資格】
内科専門医

【好きな言葉】
「何でも見てやろう」

病院と個人クリニックの間「第3の医療機関」

佐渡島の総合病院で働いていた時、離島という地域柄もあってか「そこまで重症ではないけれど個人クリニックでは対応が難しい」という患者さんが多くいらっしゃいました。そこで思ったのが「総合病院と個人クリニックの中間的な医療機関があればいいのに」ということです。エールホームクリニックの話は、まさに私が考えていた答えのひとつが提示された！という感じ。新しいクリニックをつくるというチャレンジにも大いに興味を惹かれ、MBVに入りました。

気づきを実行に移す圧倒的スピード感

一般的に、大きな病院でシステムを変えようとすると、上司や医局などさまざまな許可が必要です。このクリニックは意見が通りやすく、改善に向かうスピード感がものすごい。それを実感したのが、新型コロナの患者さんが爆発的に増えた時です。診察室のレイアウトを一部変えて対応したのですが、スタッフみんなで相談してわずか1～2日で間取りを変更。1日テスト運用し、翌日には完成形としてスタートしました。

「先生」である以前にひとりの「人間」でいたい

好きな言葉に挙げた「何でも見てやろう」は、有名な世界旅行記のタイトル。思い浮かべるとワクワクするポジティブな言葉です。私自身も旅行が好きで、もし医者にならなかったらノマド生活もいいな、なんて思ったりします。医者は患者さんから「先生」と呼ばれますが、それ以前にひとりの人間です。その気持ちは忘れたくないですね。いろいろな可能性のある「人間」の方が、人生おもしろいぞ、と思っています。

力を合わせて新たな挑戦ができる。

内科医師／医学博士 **田村 真麻** たむら まあさ

【経歴】
神奈川県横浜市生まれ
横浜市立大学医学部 卒業
横浜市立大学大学院医学研究科博士課程 修了
横浜南共済病院、横浜市立大学附属病院で内科医、リウマチ医として研鑽を積む。元長岡赤十字病院総合診療科・リウマチ科 副部長。

【専門医・資格】
総合内科専門医
リウマチ専門医・指導医
アレルギー専門医
日本リウマチ学会 登録ソノグラファー

【好きな言葉】
「清く、正しく、美しく」

早期診断・早期治療につなげたい

私が専門とするリウマチや膠原病は、専門医の少ない地方では特に診断がつきにくい病気です。最近では長岡市はもちろん、お隣の見附市から来てくださる患者さんもいて、エールホームクリニックの名前が着実に広まっているのを感じます。大きな病院に行く手前の段階で当クリニックに来ていただき、患者さんの早期診断・早期治療につなげられるよう奮闘しています。

複数医師体制だから日々勉強できる

仕事をする上で大切にしているのは「正しくやること」。そのためには知識の更新が欠かせません。内科は私を含めて現在4名の医師がいます。診察のとき、隣の部屋にいる先生が患者さんに説明するのを壁越しに聞いて参考にしたり、疑問があったら「さっきこうやってましたよね」と診察のちょっとした合間に確認したり。日々自然に学べる環境は貴重だと思います。

ひとりではできないこともここでならできる

「それぞれが専門知識を持ち寄って現場をより良くしよう」という雰囲気は、私にとってすごく新鮮です。大きな病院では他の職種との交流が少なかったり、トップダウンでものごとが決まることもありました。ここはすべての職種がフラットにつながり、相談しながら新しいことを決めていきます。新型コロナワクチン業務では、患者さんをスムーズに回すため全員でアイデアを出し合い、試行錯誤の末に医師3人で1日1,000人の接種を実現しました。ひとりではできないことも、ここでなら力を合わせてできる。そう実感した瞬間でした。

ここだからこその経験ができます。

小児科医師 **鈴木 竜太郎** すずき りゅうたろう

【経歴】
茨城県日立市生まれ
弘前大学医学部 卒業
茨城県立こども病院で小児科医として研鑽を積む。筑波大学附属病院腎臓内科を経て、国立成育医療研究センター病院 腎臓・リウマチ・膠原病科勤務。

【専門医・資格】
小児科専門医
腎臓専門医
透析専門医

【好きな言葉】
「至誠一貫」

お子さんからもらった「ありがとう」の手紙

茨城や東京で小児科医をしていた頃は、重症の患者さんがほとんどでした。総合病院からこのクリニックに来て、患者さんも業務内容も大きく変化。比較的軽症の患者さんを多く診る仕事も、たくさんの学びがあります。お子さんから「ありがとう」の手紙をもらうこともあり、素直にうれしいですね。子どもはその場を敏感に感じ取る力があります。病気について説明する際は、親御さんだけでなく、お子さんの方にもしっかり顔を向けて話すことを意識しています。

「プロジェクト」の立ち上げにワクワク

私はMBVがスタートした時からのメンバー。クリニックをゼロから立ち上げる経験は、それまでにないワクワク感がありました。今後も新しい取り組みが次々に出てくるはず。それを新しく仲間になってくれる先生と一緒に楽しみたいと思います。
新しい取り組みといえば、クリニックの近くにある長岡造形大学の学生さんの卒業制作をお手伝いさせていただきました。病気について楽しく分かりやすく解説するイラスト付きパンフレットで、研究室の優秀賞を受賞したそうです。こうした地域とのつながりも新鮮な体験でしたね。

長岡の暮らしを家族と楽しみたい

プライベートでは最近子どもが生まれました。新しく家族が増えて、仕事のモチベーションにもなっています。妻と子どもがもうすぐ里帰り出産から戻ってくるので待ち遠しいです。長岡は夏の花火や豊かな自然が魅力。家族との生活も楽しみたいと思います。

毎日の仕事がとにかく楽しいんです。

皮膚科医師／医学博士 **松井 彰伸** まつい あきのぶ

【経歴】
青森県平川市生まれ
弘前大学医学部 卒業
弘前大学大学院医学研究科 博士課程 修了
青森市民病院、弘前大学付属病院、青森県立中央病院を経て弘前大学皮膚科助教で皮膚科医として研鑽を積む。

【専門医・資格】
皮膚科専門医

【好きな言葉】
「継続は力なり」

新しいクリニックに興味を惹かれて

大学病院から独立開業するか悩んでいた時、学生時代に縁のあった澁谷先生から「長岡で新しいクリニックをやるから来ない？」と誘っていただきました。真っ先に思ったのが「おもしろそう」ということ。独立開業に向けて勉強させていただく意味でもいい経験になると思い、青森から新潟に来ました。地域が違えば患者さんの雰囲気も違いますね。優しくていい患者さんばかりです。赤ちゃんから年配の方まで年齢層も幅広いので、ひとりひとり丁寧に接するように心がけています。

先生たちとの外来の仕事に刺激

皮膚科医は私を入れて4人。同じ治療でも、使う道具や処置のやり方が違っておもしろいですね。気になったらすぐに質問して「その方法もいいなあ」と思ったり。毎日の仕事の中で吸収できることがものすごく多いと感じます。長岡駅前に秋できるエール長岡クリニックが完成したら、できることがもっと増えると思うので今後が楽しみです。

将来を見据え今を目一杯楽しむ

趣味は、仕事の後のお酒でしょうか。料理が好きなので家で何か作りながら飲むこともありますし、先生たちと食事に行ってそこで楽しむことも。いずれは青森に戻って独立を考えていますが、今は気の合う先生たちと一緒に仕事をしたり、帰りに食事したりできる空気感がすごく好きです。ここで学んだことを持ち帰り、将来は地元で自分の理想のクリニックを立ち上げたいと思います。

メディカルレボリューション
MEDICAL REVOLUTION

新しい先生との出会いが楽しみです。

皮膚科医師／医学博士 **藤本 篤** ふじもと あつし

【経歴】
岡山県岡山市生まれ
新潟大学医学部 卒業
新潟大学大学院医歯学総合研究科
博士課程 修了
新潟大学医歯学総合病院で皮膚科医として乾癬専門外来を担当し研鑽を積む。元新潟大学医歯学総合病院皮膚科講師、特任講師。

【専門医・資格】
皮膚科専門医

【好きな言葉】
「我思う、ゆえに我あり」

人柄も仕事もトップレベルの仲間たち
大学病院で一緒に働いていた苅谷先生に誘われてこのクリニックに入りました。いざ働いてみると、先生もスタッフもみんな優秀。これまでいろんな人と一緒に仕事をしてきましたが、人柄も職務能力もトップレベルだと思います。もちろん大学病院には大学病院の良さがありますが、職種の垣根を感じないこのクリニックの雰囲気が自分には合っていますね。毎日楽しく働いています。

自己研鑽し医療の質の向上へ
好きな言葉は「我思う、ゆえに我あり」。考える自分がそこにいる、それだけは揺るぎようのない真実という意味です。そこにも通じるかもしれませんが、医師は勉強や自己研鑽が欠かせません。MBVは学会などにかかる費用の補助が手厚いのも魅力。サポート額は大規模病院並みではないでしょうか。診療してお金を稼ぐだけでなく、スタッフの自己研鑽に投資してくれるのは、「医療の質を上げたい」という法人の本気度を感じます。

フランクで壁のない職場
今在籍している医師は、もともと同じ職場だったりして入った先生がほとんど。その壁をまさに「突破」して、新しい先生と働くのが本当に楽しみです。ここには幅広い世代の医師がいます。それでいて年齢やキャリアの差を感じないフランクな雰囲気。「ほうれんそう（報告・連絡・相談）」よりも「ざっそう（雑談・相談）」という言葉が似合う、スピード感のある職場です。ぜひ一緒に働きましょう！

みんなで仕事する、その雰囲気が大好き。

皮膚科医師 **梅森 幸恵** うめもり ゆきえ

【経歴】
福井県福井市生まれ
富山医科薬科大学医学部卒業
富山医科薬科大学附属病院、福井県済生会病院、新潟大学医歯学総合病院、長岡赤十字病院で研鑽を積む。元長岡赤十字病院皮膚科部長。

【専門医・資格】
皮膚科専門医
レーザー専門医
がん治療認定医

【好きな言葉】
「なるようになる」

周りのスタッフがいるから医師は仕事ができる
このクリニックのいいところは、職種にこだわらない動きができること。一般的に、医師は医療システムの一番上にいるイメージですが、ひとりでは仕事ができません。看護師さん、検査技師さん、事務や運営の方がいてこそ仕事ができる。私はそれを無視したくないんです。だから私は仕事の合間に、看護師さんのちょっとした作業を手伝ったりもします。お互いの業務を分かった上で、医療に関わるあらゆる仕事をみんなでやる。その雰囲気がとても好きなんです。

日々アップデートを続ける職場
このクリニックはスタッフの動きがスピーディー。ちょっとした物の置き場とか、事前準備とか、小さな工夫を重ねてどんどんアップデートしていきます。新型コロナワクチンの時もそうでした。患者さんの動きがスムーズになる動線を考えて、まずはやってみる。改善すべきことは改善して、より良いシステムを作り上げる。それが当たり前にできる職場です。

幅広いニーズに対応できるクリニックへ
皮膚科医としては、幅広いニーズに応えることを大切にしています。レーザーや美容系もやりますし、「これは内科につないだ方が良さそう」とか「あの病院に紹介した方がいいな」という適切な道筋を立てるスキルも重要です。さまざまな検査や処置ができる設備も充実しているので、今後も患者さんのニーズに応える質の高い医療を提供していきたいと思います。

ひとりひとり、秘めた個性がある。

皮膚科医師／医学博士 **苅谷 直之** かりや なおゆき

【経歴】
神奈川県横浜市生まれ
新潟大学医学部 卒業
新潟大学大学院医歯学総合研究科
博士課程 修了
新潟大学病院、長岡赤十字病院を経て新潟大学皮膚科講師として研鑽を積む。元苅谷皮膚科医院副院長。

【専門医・資格】
皮膚科専門医

【好きな言葉】
「笑う門には福来る」

人間性のいい優秀なメンバーたち
クリニック立ち上げのタイミングから携わり、今は現場でドクターのまとめ役も担っています。ここで働く人たちは、みんな優秀。人間性がすごくいいんです。根が明るくて、周囲のことを考えて行動してくれる。それぞれ秘めた個性は強いと思うのですが、周りの空気を感じながらベストな動きをしてくれていると感じます。これまで数々の職場を経験してきましたが、ここは特に団結力もあるいい職場ですね。

診療科を超えたコミュニケーションが当たり前
私は大学病院で長く勤めた後、横浜にある実家のクリニックを継ぐため数年だけ地元に戻りました。そこではちょっと孤独感もあって。大学病院の生活が長かったこともあり、たくさん人がいてにぎやかな方が性に合うようです。このクリニックは皮膚科の先生はもちろん内科や小児科の先生とも交流があります。大学病院では診療科を超えてのコミュニケーションはあまりなかったので、それだけでも新鮮ですね。

チームのまとめ役として盛り上げたい
単身赴任なので週末は横浜に戻ることも。家族の顔を見るのはうれしいですし、仕事のモチベーションになります。新潟での生活も20年以上。その中でMBVという新しい場に出会い、気の合う仲間に恵まれました。あれこれ意見を交わしながら現場を改善していく、イキイキとした空気に満ちた職場です。今後も現場のまとめ役としてチームを盛り上げていきたいです。

新しい医療の場を一緒につくろう。

内科医師 **伊藤 朋之** いとう ともゆき

【経歴】
茨城県水戸市生まれ
富山医科薬科大学医学部 卒業
富山医科薬科大学病院、関連病院を経て
長岡赤十字病院で内科医として研鑽を積む。
元長岡赤十字病院リウマチ科部長、
総合診療科部長。

【専門医・資格】
総合内科専門医
リウマチ専門医・指導医

【好きな言葉】
「まっすぐ」

MBVの仕事は新鮮さの連続
「長岡に新しい医療の場をみんなでつくる」。そんな澁谷先生の考えに共鳴してMBVに入りました。クリニックの建物さえまだない状態からのスタートで、診察室の配置から何から、その時のメンバーみんなで考えて。ワクワクする貴重な経験でした。今はスタッフが増えましたが、若い先生と働くのも楽しいですし、逆に教わる場面もたくさんあります。

職種の垣根をなくす朝の勉強会
毎週1回、朝5分間の勉強会はすごく大切な時間です。各職種の仕事を周知し情報を共有するため、医師、看護師、検査、事務、運営の各部が持ち回りで話します。時間にしてみればたった5分。でもその5分間が、普段からの連携の良さや、このクリニックらしいスタッフ同士の距離の近さ、ひいては患者さんのためになる質の高い医療につながっていると思います。

それぞれが役割を果たす最高のチーム
スタッフ同士の距離は近いですが、ただの仲良しではありません。ひとりひとりが自分の持ち場でしっかりと役割を果たす最高のチームです。私もいい意味で緊張感や責任感を感じながら仕事を楽しんでいます。今回の全国医師リクルートでは、職種の垣根や上下関係を気にせずのびのびやりたい人、このクリニックや地域の医療を良くするために臆せず前向きにやってくれる人に来てほしいです。世の中はどんどん変わります。新しい医療の場をつくる、その目的に共鳴してくれる人、ぜひ一緒にやりましょう！

メディカルビットバレーの医師たちに、自身の想いを語っていただきました。

CROSS TALK

TALK/02 若手医師トーク

皮膚科医師 松井 彰伸（35才）× 小児科医師 鈴木 竜太郎（34才）× 内科医師 倉科 健司（32才）

Q1 みなさん大学病院や総合病院からメディカルビットバレー（MBV）に入りました。率直な感想は？

松井　そもそも病棟のない職場が初めてで、働き方がまったく違いますね。特に大きいのは、今まで感じていた「医者ならではの世界」みたいなのがなくて、フラットに仕事ができること。今うちらは30代半ばで、ほかの先生はみんな年上だけど、すごく自由にさせてもらってるよね。

鈴木　ほんと、科の垣根を超えても相談しやすいと思う。

倉科　「今忙しそうだからやめとこうかな」とか遠慮する感じもあまりないよね。組織は大きくなればなるほど硬くなるというかルールが厳しくなるのが一般的だと思うけど、MBVでは柔軟な動き方ができるよね。それと、街のクリニックとしては診療のカバー範囲が広いのも特徴的。地方の一次・二次病院か、それ以上の検査を出せるくらいのレベルだと思います。

鈴木　個人のクリニックは身近で行きやすいけど、検査体制や設備にはどうしても限りがあって。それで必要な検査ができなくて「軽い病気だと思うけど、万が一があるといけないから敷居を下げて大きい病院を紹介しようか…」ってなったり。でもこのクリニックは検査体制が充実しているから、医師としてはその辺のストレスがないよね。病院のような充実した検査体制と、クリニックのような身近さ。両方のいいとこ取りで、患者さんにとってもメリットが大きいんじゃないかな。

倉科　内科と皮膚科は複数医体制だから、誰かのところで急変があっても外来が止まらない。これがエールの強みだよね。

Q2 ところで、3人とも仲が良いですよね。普段からそういう感じですか？

鈴木　そうですね。3人とも歳が近いので。私と松井先生は同い年です。

したいか、そのバランスをどう考えるかは人それぞれですよね。今は時短や育休などのサポート体制が当たり前ですが、半日勤務なら週5日とか、フルなら週3日とか縛りもあって。それがもっと柔軟になると働きやすいと思います。MBVはその辺りがすごくフレキシブルで、私の場合は話し合って今の勤務時間を決めましたし、人それぞれ望む働き方ができると思います。

Q2 休日はどのように過ごしていますか？

田村　近場のイベントに出かけたり、旅行が好きなので土日休みが取れたら一泊旅行に行ったりしますね。長岡は自然が豊か。夏から秋にかけては虫の声で季節の変わり目を感じています。子どもを連れてあちこち出かけられるのは楽しいですね。

梅森　私は結構、休日も学会やセミナー、講演会に行っちゃってます（笑）。そこは夫とも話し合って、理解してもらった上でそうしています。子どもといる時間はあまり多くないですが、病院の頃と比べたら当直がないので身体的にはラクですし、子どもの精神衛生上も今の方がいいのかなと思っています。

田村　ここ最近は、日曜にワクチン業務が入ることもありますね。

梅森　なかなか休みがなくて（笑）。ま、基本的に仕事好きなのでいいですけどね。

田村　新潟はコロナ第7波でも死亡数が全国と比べてかなり少数でした。私たちがやってきたワクチン接種や発熱対応が、少しでも役に立っているのかなと思うとがんばれますね。

Q3 今回の全国医師リクルートでは、どんな人に来てほしいですか？

田村　女性の先生の中には、育児をしながら病院やクリニックなどで週数回の非常勤で働いている人も多いと思います。非常勤だと少なからず「その時だけ」という感覚になってしまいますが、フルタイムではなくても1か所に常勤するメリットは、キャリアの面でもやりがいの意味でも大きいはず。MBVは柔軟な働き方ができますし、「どこかに所属して働きたい」と考える人には合っていると思います。

梅森　私が来てほしいのは、シンプルに「働きたい人」。それと「これでいいや」と思わない人。このクリニックは小さいことでもみんなで相談して改善していくので、新しいことに臆さず、古いものにとらわれず、前向きな人がいいと思います。

田村　ほんと、日々小さな変化がありますよね。「もうちょっとこうしたらうまくいくんじゃない？」というのを見つけて、システムを作るのがとっても上手。

梅森　気づいたらすぐやってみる感じですよね。あと女性スタッフが多い職場なので、普段からコミュニケーションを大事にしています。女性は話すことでフラストレーションを発散する面がありますから。患者さんの話を引き出して診療のヒントにする皮膚科医の仕事にも通じるかもしれませんが、「最近どう？」と周りのスタッフに話しかけたりして。そういう普段からの会話を楽しめる人にぜひ来てほしいと思います！

TALK/01 女性医師トーク

皮膚科医師 梅森 幸恵 × 内科医師 田村 真麻

Q1 お二人ともお子さんがいらっしゃいますよね。仕事と育児の両立はどうですか？

田村　私は4歳の子どもがひとりいます。出産した時はまだ前の病院で働いていて、生後3か月くらいで職場復帰。時短勤務からスタートして、子どもが1歳になるタイミングで通常勤務に戻りました。このクリニックでは8:30～17:00の勤務で、仕事帰りに子どもを迎えに行ったりします。梅森先生はフルタイムですよね。

梅森　そうですね。平日は診察後、だいたい19時くらいには帰ります。私は6歳と3歳の子どもがいますが、出産などのライフイベントを理由に仕事をセーブするのが嫌で。やりたいことができないのを子どものせいにしたくないし。だから育児休業は最小限にして、下の子の時は8週間で復帰しました。

田村　すごいですね。

梅森　皮膚科って見たり触ったりするのがすごく大事なので、毎日やらないと感覚が鈍る気がして…。私の場合は仕事ができない方がストレスでしたね。「あー、大人としゃべりたい！」って（笑）。女性医師って育児との両立とか時短勤務でよくピックアップされますけど、助けてほしいポイントは人によって違うと思うんです。

田村　分かります。どれだけ仕事をしたいか、どれだけ家族と過ご

メディカルレボリューション
MEDICAL REVOLUTION

環境だと思いますよ。

松井　確かに。それは感じます。患者さんやスタッフがみんないい人で、穏やかですよね。

Q2　実際に働いてみて感じた、MBVの魅力は？

苅谷　地方でこれだけのドクターを抱えているクリニックはめずらしい。「数の力」は大きいと思います。手前味噌ですが、ここにいるのは優秀なドクターばかり。優秀な人材をこれだけの人数抱えていることが、MBVの魅力であり、ポテンシャルだと思います。

松井　そうですよね。MBVは長岡駅前に新設される予定の「エール長岡クリニック」開業に向けて動いていますが、新しいクリニックができることへの期待も大きいです。

鈴木　私は小児科医ひとりで大変な部分もありますが、毎日の仕事を楽しんでいます。それは他の科の先生との交流があることも大きいです。それに、看護師や他のスタッフも能力が高いと思います。

松井　ほんとそう！

苅谷　MBVは「少数精鋭」を合言葉にスタートしましたが、今やスタッフは50人近く。既に少数ではありませんが（笑）、「精鋭」がそろっている。このスタッフこそがMBVの可能性の象徴なんだと思います。

Q3　全国医師リクルートで求める人物像は？また、みなさんの今後のビジョンを聞かせてください。

苅谷　人柄の良い人に来てほしいです。今ある輪の中に入って来てくれる方、一緒に働く仲間を大事にしてくれる方に、ぜひ来ていただきたいですね。

鈴木　同感です。小児科医は今私ひとりなので人材は喉から手が出るほど欲しいですが、最優先条件は「人柄が良い人」。小児科医ならなお良しです！

松井　私は、お酒が好きな人かな（笑）。強い弱いは別にして、お酒の場やみんなで楽しむ場が好きなスタッフが多いので。今後のビジョンで言うと、私はいずれ地元の青森で自分のクリニックを持ちたいと考えています。それに向けてMBVで吸収できることをどんどん吸収していきたいです。

鈴木　私は最初、澁谷先生に「新しいものを創る過程を一緒に勉強しよう」と誘われてここに来ました。現場では毎日のように新しいことや改善することがあって、より良いクリニックをスタッフ全員で創り上げている感覚です。それを経験して、10年後、20年後に自分がどう思うかは分かりませんが、最高の医療の場を創り上げるMBVでの仕事を、全力で楽しみたいと思います！

TALK/03
県境を越えた医師トーク

皮膚科医師	皮膚科医師	小児科医師
松井 彰伸（青森県から）	苅谷 直之（神奈川県から）	鈴木 竜太郎（東京都から）

Q1　みなさん新潟県外からメディカルビットバレー（MBV）に来た理由を教えてください。また、新潟や長岡の印象はどうですか？

苅谷　私は大学進学で横浜から新潟に来て、そのまま勤めたので新潟歴はもう20年以上。MBVに来る直前は、横浜にある実家の皮膚科医院にいました。その時、新潟時代の同僚だった澁谷先生から「新しいクリニックをやるからぜひ一緒に」と声をかけていただいて。なので県外から新潟に来たというより、久々に戻ってきた感じ。鈴木先生、松井先生とは違うパターンですね。

鈴木　私たちは澁谷先生とは大学時代のつながりがあって、その縁でこちらに来ました。

松井　私は青森の大学病院にいたのですが、独立開業するか悩んでいて。それでクリニックの働き方に興味があったのでMBVに入りました。長岡で暮らすのは初めてですが、夏の暑さはなかなかですね（笑）。青森とはだいぶ違います。

鈴木　私は茨城出身なので、暑さはそれほどでもないかな。今年の夏は3年ぶりの長岡花火が見られて良かったです！

苅谷　今回は全国医師リクルートですが、正直、天気の要素は小さくないかも（笑）。こればっかりはどうにもならないので…。でも、そこさえクリアできたら、人はいいし、自然は豊かだし、楽しく働ける

倉科　私は松井先生、鈴木先生の3つ下。一番歳下なんですけど、生意気っていう。

一同　笑。

松井　でも、上の先生とも壁がないよね。一緒にご飯食べに行ったりして。皮膚科医の中では自分が一番年下だけど、先輩がみんないい先生で甘えられるし、上にいるのが今の先生たちで本当に良かったと思うもん。「こういう診療をやってみたいんです」と相談した時も「これはコストがかかるけど、じゃあこれを導入しようか」とか、すぐに話を聞いてくれる。内科と皮膚科の共通患者さんのことも、内科の先生にスムーズに聞きに行けるし。だから若い先生が入ってもすごく勉強になると思う。

倉科　そうだね。研修医明けたてとかは、さすがに困ると思うけど。自分が入院を指示した患者さんの経過がある程度予測できて、あとは学ぶ意欲が大切だよね。

鈴木　外来も病棟もそれなりに経験して、必要なことがだいたい身に付いてると働きやすいかもね。

倉科　さっきの話にも通じるけど、あまり検査を出せないクリニックだと診断がつけられないまま他の病院を紹介して「あの患者さん、結局何だったんだろう」で終わってしまうこともある。でもこのクリニックは外来で完結する病気も多いから、答え合わせができるのもポイントだと思う。

鈴木　自分ひとりで診断がつかなくても、クリニック内の別の先生にバトンタッチしたりね。勉強するチャンスはとても多いと思います。

倉科　「他の先生の目が入る」という、いい意味での緊張感もあって、医療の質が担保される面もあるかもね。

Q3　看護師さんや検査技師さんなど、他職種とのつながりはどうですか？

松井　すっごくいい人たちじゃない？看護師さんも事務の人も。気を遣える人が多くて、何の文句もない。逆に気を遣わせすぎてるんじゃないかと思うくらい。

倉科　みんなよく笑うし、明るいよね。

鈴木　お互いの関係性で言うと、思ったことを言えるし、言ってくれる。本当は言いたいことがあるけど面と向かって言えずに心の中でモヤモヤ…という感じがない。気づいたらお互いすぐ言うし、「いい職場でいい仕事をしよう！」という風土があるよね。口だけの人がいなくて、しっかり行動が伴ってる。

倉科　何か確認する時も、その理由や必要性までちゃんと説明してくれて。「こっちも負けてらんねえな、頑張ろう」って思えるし、お互い高め合える職場です！

あなたの

行きたいところが「かかりつけ医」

最近触れる機会が多い「かかりつけ医」という言葉。「自分のかかりつけ医はどこだろう?」と腕組みしてしまう人もいるかもしれません。今回は「かかりつけ医」をテーマに、かかりつけ医の役割や探し方、子どもの予防接種という点から、〈エールホームクリニック〉の先生3名に、それぞれお話を伺いしました。

安心への第一歩
頼れる「かかりつけ医」持っていますか?

編集部(以下、編):〝あなたの行きたいところが「かかりつけ医」〟とはかなりインパクトのあるメッセージですよね!?

澁谷先生(以下、先生):そうですよね。そう思われるかもしれませんが、これが「かかりつけ医」の理想像だと思っています。そして、重要なのは「行きたいときに気軽に行って、何でも相談できる」という点だと思います。

編:具合が悪いけれど、何科に行ったらいいかわからない……。というとき、「かかりつけ医」を持っていないと、つい大きな病院に行ってしまいがちです。

先生:海外では「かかりつけ医」からの紹介状がないと大病院には行けない国が多いです。けれども、日本では基本的に誰でも行けるので、いつも混雑していますよね。大病院の本来の役割は外来ではなく「入院・手術・救急・重症患者」の対応です。

編:大病院と診療所やクリニック、役割はそれぞれあるということですね。※図1参照

先生:その通りです。最近、予防接種で多くの方と接していますが「〈エールホーム〉さんに行きたいけれど、長年通っている医院があるから行けない……」と打ち明けてくださる方がよくいらっしゃいます。そんな方にも「いつでもいらしてください」とお伝えしています。

編:確かに「かかりつけ医」を変えるのには勇気がいりますよね。

先生:歳を重ねると必要な医療が変わってくることは当然です。それに伴い、今の自分に相応しい医療を受ける権利は誰にでもあります。

編:気軽に病院は変えてもいいのですか?

先生:もちろんです! 街のレストランや美容室みたいに気に入るところに出会うまで病院は変えてもいいと思いますよ。まずは一回行ってみて、合わなければやめればいいんです。選択の自由は皆さんにあります。

編:〝あなたの行きたいところが「かかりつけ医」〟という意味がよくわかりました! 「行きたい、通い続けたい」と思える安心感が大切ですね。

先生:ええ、そうです! 具合が悪いときはもちろん、最近受ける機会が増えてきた予防接種も「行きたいところ」に行ってみてください。

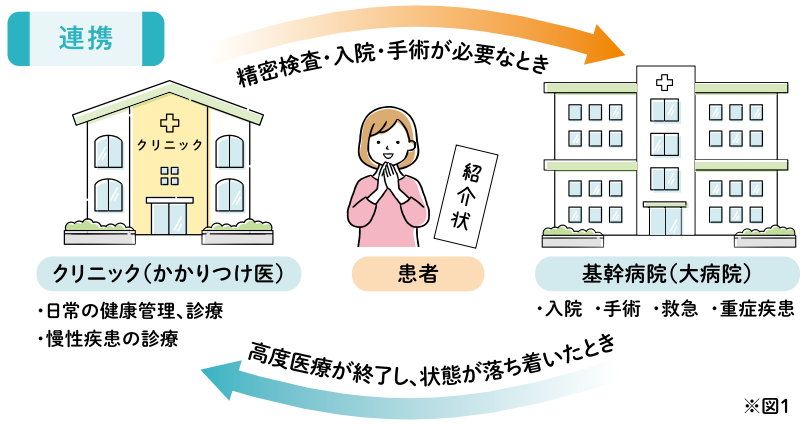
お話をお聞きした
澁谷 裕之 先生
- 総合診療医
- 新潟県長岡市生まれ
- 弘前大学医学部 卒業

「かかりつけ医」を選ぶポイント

- 通いやすいところ。
- 自分にとっての相性のよさは大切。
- 幅広くなんでも総合的に診てくれるところ。
- 基幹病院、専門医との連携がある。

「かかりつけ医」の探し方

- 健康診断や予防接種を受ける。
- 気になるクリニックや医院のホームページをチェックする。
- 周囲の人のクチコミや評判を参考にする。



※図1

教えてドクター!

小児科

Q 最近よく耳にするHPVワクチンについて教えてください。34歳 女性

〈エールホームクリニック〉
小児科医
鈴木 竜太郎
小児科専門医
腎臓専門医

A HPV(ヒトパピローマウイルス)は子宮頸がんの原因となるウイルスです。ありふれたウイルスで多くの方が一生のうちに一度は感染しますが、感染してもほぼ無症状です。しかし、慢性感染に移行すると15〜20年かけて子宮頸がんの発症につながります。HPVワクチンはHPV感染を防ぐことで、子宮頸がん発症を減らす効果があると言われています。2022年4月から接種の推奨が再開され、対象者は小学校6年生〜高校1年生の女性です。

ここがポイント! HPVワクチンは子宮頸がんの発症を減らす効果があると言われ、2022年4月から接種の推奨が再開されました。

皮膚科

Q 帯状疱疹を予防することはできますか?
49歳 女性

〈エールホームクリニック〉
皮膚科医師／医学博士
苅谷 直之
皮膚科専門医

A 帯状疱疹は、水痘・帯状疱疹ウイルスにより生じます。皮膚に痛みを伴う赤みと水ぶくれができます。患者さんは50歳以上のことが多く、年齢とともに増える傾向にあります。帯状疱疹で最も問題になるのは痛みです。一部の患者さんでは、帯状疱疹後神経痛といって数ヵ月以上にわたり痛みが続き、生活の質を低下させることもあります。自費診療となりますが、50歳以上の方を対象に、発症を予防するワクチン接種を行うことができます。ワクチンは2種類あり、価格や接種回数が異なり、効果にはやや違いが見られます。気になる方は医療機関へご相談ください。

ここがポイント! 50歳以上を対象に発症予防のワクチン接種も可能です。

「医療と経営の分離と融合」で病院経営の可能性を広げる

複数の常勤医が横断的に担当する「ワンフロア診療」と、複数医師が専門分野を超え連携して一人の患者に寄り添う「シナジー診療」を提唱し、新潟県長岡市の「医療法人メディカルビットバレー（ＭＢＶ）」を率いる澁谷裕之理事長。その評判が口コミで広がるなど、新潟県外からも注目されています。澁谷理事長へ未来への展望をうかがいました。

画期的な組織運営で地方医療に新風

法人を立ち上げた当初は医師もスタッフも少数でした。それが今では常勤医の平均年齢は41歳、他のスタッフも大幅に増え、さまざまなお問い合わせにお応えしています。人口26万人超の地方都市において、黒字経営を維持する秘訣は「医療と経営のよりよい分離」という理念。澁谷理事長はこの理念を今まで一貫して掲げ、実践しています。

病院やクリニックの経営も医師が担うことが多い現状について、「組織運営の仕組みも、医療を支えるスタッフ心理についても勉強していない、経験も少ない医師が、診療しながら先頭に立って経営すること自体に無理がある。かといって医師が運営にばかり注力していては医療の現場が回りません。全体を動かす責任は、医師ではない経営の専門家がすべきというのが私の考えです」と澁谷理事長。

ＭＢＶはこれまで、医療側と経営側がフェアでフラットな関係性と信頼を築き、しっかりと意見を交わし合い、黒字経営を維持してきました。

「医療は社会性が強い。黒字を目指すといっても、自分のためだけに利益を追求することとは全く違います。より質の高い医療を提供し、社会を良くするために医療組織の黒字経営は必須だし、クリアするのは当然のことですよ」

肝心なのは、「経営は分からないから」とアウトソーシングするのではなく、「組織内のメンバーだけで医療と経営の二つを動かすこと」と澁谷理事長は強調します。「自分の組織だからこそ責任を持って課題解決の判断ができるし、実行に移すこともできるし、プラスのスパイラルとなって波及していく。ＭＢＶに他のスタッフを軽く見たり、偉ぶったりする医師は一人もいません。医師としても人としても総合力の高い『いいやつ』ばかりで、他のスタッフもそう。そういう人しか入職してきません。うちは実力主義と少数精鋭を徹底していますから」と澁谷理事長はほほ笑みます。

チームワークが最大のポテンシャル

取材を通して驚くのは、医師同士だけでなく、他のメディカルスタッフや事務方スタッフも含めたチームワークの良さです。澁谷理事長の理念に共感して全国から集まった医師たちは「職種の垣根がなく、互いに切磋琢磨して高め合える」「ここで働くことが本当に楽しい」と口をそろえます。

「要はみんなが『心を開く』ことなんです。他者を受け入れ協力し合うことが、結果として自分の価値を上げるし、プラスのスパイラルとなって波及していく。ＭＢＶに他のスタッフを軽く見たり、偉ぶったりする医師は一人もいません。医師としても人としても総合力の高い『いいやつ』ばかりで、他のスタッフもそう。そういう人しか入職してきません。うちは実力主義と少数精鋭を徹底していますから」と澁谷理事長はほほ笑みます。

澁谷理事長が「ＭＢＶ最大のポテンシャル」と話すチームワークの力は、新型コロナワクチン接種でも発揮されました。これまでにＭＢＶで接種した回数は20万回超（2023年1月15日現在）。そのすべてを医師が接種しています。接種にあたりスタッフ全員で効率的な接種方法を工夫し、試行錯誤して周到に準備した成果です。このスムーズで大規模なワクチン接種はＭＢＶの名前を広く知らしめ、地域医療にも貢献する実績となりました。その結果、新潟県及び、県内自治体との仕事もしています。

必要なのは組織経営の強化と進化

「医療ではなく組織体制の問題で財政破綻する医療機関は、これからの数年でさらに増える」と澁谷理事長は予測します。

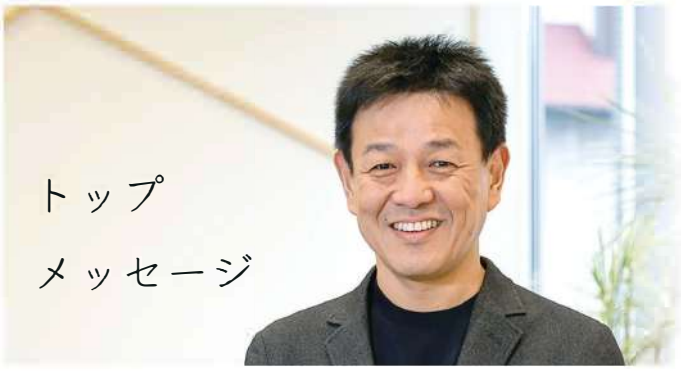
「私は5年後を常に考えています。うちはこの2年で急激に成長しましたが、これでずっと安泰なんて思っていない。ピークを迎えたら後は下がるだけで自滅しますから、余力を残しながら少しずつでも成長し続けることが肝心なんです。今後はさらに経営に力を入れ、事業規模を拡大し、社会に貢献できる医療パワーを生み出していく。『医療と経営の分離と融合』で未来の医療に備えます」

経営面強化のため、マネジメントエキスパートの育成や即戦力となる人材の受け入れも予定しています。「運営のプロフェッショナルと仲間になり、新たなステージを目指したい。新しい考え方が必要なんです。そのために、前例にとらわれず新たな発想を持つ医療系での従事経験のないスタッフを採用したいと考えています」

既成概念や医療業界の常識を「突破せよ！」の言葉を胸に、創業3年目で組織のテーマ「好きな仲間と、好きな場所で、ワクワク仕事して、サイコーの業績をあげる！」を実現したＭＢＶ。2023年秋には、長岡駅前の再開発エリアでの取り組みも控えており、長岡市と調印を交わしました。地域医療を通じて人にも、まちづくりにも貢献するＭＢＶの「医療イノベーション」。その進化はますます加速していきます。

澁谷裕之理事長プロフィール

新潟県長岡市生まれ。弘前大学医学部卒業。米沢市立病院、秋田厚生医療センターを経て長岡赤十字病院にて総合診療科副部長を務める。2020年4月「医療法人メディカルビットバレー」を設立。



出展／エールホームクリニック 公式note ►https://note.com/mbv_aile

前例なきをやる

澁谷 裕之（しぶや ひろゆき）
内科医師／医療法人メディカルビットバレー 理事長
新潟県長岡市生まれ。弘前大学医学部卒業。米沢市立病院、秋田厚生医療センターなどを経て長岡赤十字病院で総合診療医として研鑽を積み、総合診療科副部長を歴任。2020年4月に医療法人メディカルビットバレーを設立。家庭医療専門医、プライマリケア認定医。好きな言葉は「即断即決即実行」、「適材適所」

創業への想い 01

2020年10月

医療法人メディカルビットバレー（以下、MBV）は、医師不足に悩む地方に信頼できる医師を集め・育てるシステムを創り、地域医療を活性化することを目的に創業。全ての診療科が同じフロアで協力しあいながら、各自がプロとして仕事に励むことで、効率のよい診療体制の構築とサイコーの成果の実現を目指しています。

質の良い医療を提供するには、そこで働く人たちがワクワク楽しく、前向きに仕事ができる職場（環境）が必要です。私たちは仕事に人生の多大な時間をかけるわけですから、ワクワク、楽しく仕事をしなければもったいないと思います。MBVでは、スタッフルームの共有を図るなど、さまざまな取り組みを行うことで、医療業界にありがちなヒエラルキーを極力なくしフラットで良好な職場づくりを図っています。
約170年前、アメリカ・ミネソタ州の雪深い田舎町で小さな診療所としてスタートしたメイヨー・クリニックは、単なる医療機関でなく、事業体として世界的に評価され、今や同国を代表する医療機関の一つになっています。私たちMBVも、日本海側の雪深い「ながおか」から日本版メイヨー・クリニックを目指します。行政、民間、大学に積極的に働きかけ巻き込んで、医療を柱とした圧倒的に新しい価値観を創造し、MBVを誰もが働きたいと思う憧れの職場にしたいのです。

「好きな仲間と、好きな場所で、ワクワク仕事しながら、サイコーの業績をあげる!」は、MBV普遍のテーマです。
医療は誰もが必要とする普遍的な分野で、社会全体を元気にする力をもっています。MBVは医療を通じて、想像力、勇気、仲間のチカラで「ながおか」に最大限貢献していきます。新しい医療が、「ながおか」から始まります。

2021年の誓い 02

2021年1月

2021年、誰にとっても、MBVにとっても激動の1年が幕開けしました。こんな時だからこそ、みんなで一丸となって常に変わらぬものを意識して、進むべき先をずっと見据えて、右往左往せずにその方向に1ミリでも前進する1年にします。
MBVは構想開始から約2年半、医療法人設立から10か月、クリニック事業開始から5か月と歴史が浅いです。
この短期間で僕の想定をはるかに超えるスピードでMBV理念に共感してくれるいろいろな分野の仲間が増えました。
一方、この変化、スピード感はMBVを知らない方々を驚かせたかもしれません。そんなタイミングで昨年末に『財界にいがた』の取材を受けました。なかなか言葉で表現することは難しいと感じていたMBVのありのままの姿が記事になりました。
今年はさらに多くの方々にMBVを知ってもらい、共感していただけるように積極的に活動していきます。
本来なら持ち前のいつでもどこでも誰にでも会いに行くフットワークの軽さで勝負したいところですが、もうしばらく我慢です。それでも、まずは「さっさとやってみる」が大事ですので、この場に月1回のペースでMBVについて書いていきます。
一人でも多くの方々に読んでいただければうれしいです。そして、一人でも多くの方々がMBVに共感していただければもっとうれしいです。

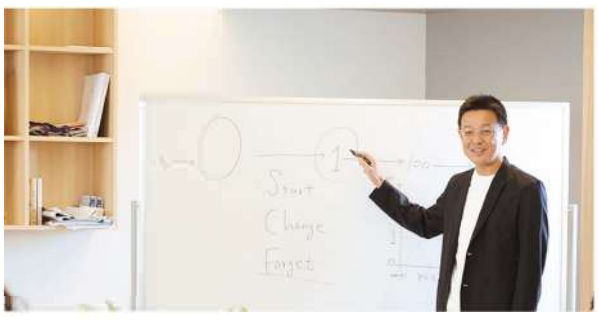
本年も、みんなで楽しくワクワク働いて、しっかりMBVを育てていきますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

ボクらの「企業文化」 03

2021年2月

いつも、ありがとうございます。
MBVの澁谷です。

最近、ホームページやSNSのアクセス数が急に増えてきていて、ちょっと緊張してしまいます。
私たちのこだわり
「あたらしい医療のカタチ」を社会に提供するために始まったMBVには、当然ながらこだわりがたくさんあります。
そのこだわりをいかに自然に、楽しく、知らず知らずにスタッフみんなに習慣化してもらうようにする(仕向ける)こと、これは大事な僕の役割です。



こだわりの一つに「顔出し」があります。

というのも、僕は、企業にとって、とりわけ医療分野では「顔出し」＝「品質保証」と考えているからです。
あたりまえ過ぎますが、医療は医師だけで成り立っているわけではありません。全職種、全スタッフの仕事で成り立っているのです。
精密な時計ほど大小たくさんの部品で成り立ち、どこかひとつでも故障すれば動かなくなります。原因が小さな部品であるほど見つかりにくく、修理には困難が伴います。僕を含めた全てのスタッフの全ての仕事、つまり全ての部品に「品質保証」をする意味で、MBVは全員「顔出し」します。
このことは、スタッフみんなに、それぞれが自分の役割を認識し、仕事に責任をもつと同時に、すべての職種が「必要性」という尺度ではフェアであることを実感してもらう意味もあります。
フェアであることを実感し、それぞれの仕事に誇りを持つこと、これも結局は「品質保証」につながります。
どんなに有能で、どんなに素晴らしい過去の実績があっても、「顔出し」できない方は採用しないし、逆にいえば、「顔出し」できれば、経歴や実績を問わないのが、MBV流です。
「顔出し」は、未来に対する覚悟だと思っています。
企業文化の創出
実績も、お金も、信用も… 全てがナイナイ尽くしの創業期に、理想の実現に向けて、みんなで創る習慣化はまさに企業文化そのものです。
ゼロ(マイナス)から創りあげることのできるスタートアップの特権なのです。
4月から新たにたくさんの仲間が加入します。共感さえ頂ければ「来るもの拒まず、去るもの追わず」のMBVですが、ほんとうは誰にも去ってもらいたくありません。
誰もが離れたくない、そして誰もがずっと働きたいと思うような企業文化をみんなで創っていきたいと思います。

今後とも、みなさまからの熱いエールを宜しくお願いいたします。

「日常の才能」 04

2021年3月

いつも、ありがとうございます。
MBVの澁谷です。

あっという間に2021年も3月を迎えました。花粉症持ちの僕としてはツラい時期ですが、街の景色がモノトーンからカラーへと変化する、一番好きな季節の変わり目です。

目の前の景色が激しく変わり続ける毎日。
季節の移ろいを遥かに凌駕する、この変化スピードにドキドキが止まりませんが、一方、共感力で僕らの周りに集まる、才能ある仲間の力を目の当たりにしてワクワクします。

このようなたくさんの力のおかげでMBVは、“緻密”に“スピード感”をもって、目指すべき道を進むことが出来ています。たくさんの仲間たちに日々、感謝です。
僕は、昔から無類の「才能」好きです。
もちろん、野球やサッカーなどの華やかなスポーツの才能、将棋や囲碁、数学、金融工学のような「宇宙的な才能」も好きです。ですが、僕は、そこかしこにひっそり咲いている「日常の才能」が大好きなのです。

みなさんはこんな経験ありませんか?
まちのお肉屋さんや八百屋さんなんかで、あらかじめお客さんが何を買うかを、予測できているかのように瞬時に金額を計算する店のご主人と、おつりと同時に袋詰めされた商品を手渡してくるそのパートナー。
このような人たちを見つけると、その才能に興奮します。
また、信じられないくらい合理的な動きで、お客さんを喜ばせながら料理や飲み物の注文をどんどん捌いていく居酒屋のご主人や女将さん。ついつい、その才能あふれる劇場感を楽しみに、何度も通ってしまいます。

そういうお店ってどこも繁盛していますよね。

結局、日常の才能って、相手のことをよく見ること、相手のことをよく考えることで、その才能が開花するのだと思います。
もちろん、僕たちに置き換えれば、相手は患者さんであり、そのご家族であり、さらには、地域や社会です。
MBVには日常の才能があふれるスタッフがたくさんいます。
組織内のあらゆる壁を取り払って、互いに“よく見ること”、“よく考えること”の環境を創り出すことで、個人の才能を開花させ、更にあらゆる情報を共有することで、組織力が高まり、地域や社会に貢献でき、また、共感されるのだと思います。
MBVは2021年4月に新たな才能を迎えて、そして、あたらしいフェーズに入ります。

引き続き、みなさまからの熱いエールをよろしくお願いいたします。

2021春「出会い」 05

2021年4月

いつも、ありがとうございます。

おかげさまで創立1周年をむかえました。

日々、新しいご縁、広がりに感謝する毎日です。
今まで、コロナ禍については、あえてほとんど触れてきませんでした。
どんなに報道を見ても、どんなに専門家の話を聞いても、読んでも、コロナ禍の本質が掴めず、全体像が自分の中でつながらなかったからです。
こんな経験はしたことがありません。
このような状況で、エールホームクリニックでは唯一、未来への希望が見えたコロナワクチン接種に全力を注ぐことに決めました。
誰しも、未知の世界には不安があります。それでも、まずはやってみて、走りながら改善、調整すべきと思ったのです。

少しでも接種の不安を取り除こうと、クリニックの全スタッフでアイデアをひねり出しました。
また、安全で効率の良い接種を行うために普段から関係性を大切にしてきた調剤薬局の株式会社共栄堂と、さらなる協力体制を構築しました。
こうしたチーム体制によって、接種に来られたみなさまの表情は接種前と接種後では全く違います。
クリニックを出られるときは、笑顔が広がります。
つながらなかったコロナ禍で、コロナワクチン接種は社会を前に進める、平和をもたらす手段であると実際に運用してみて初めて確信しました。
コロナ禍で個人や組織や社会が失ったものがどれくらいかは、もう想像できません。
それでも、ここから立ち上がる、取り返すしかないと思います。
職域接種が始まります。

たくさんの企業様と関わらせていただいています。
民間企業の社会貢献に対する姿勢とスピード感に感動しています。
僕たちも、誰もが笑顔になる日のために、みんなで汗をかくつもりです。
コロナ禍を乗り越える過程で新しい出会いやつながりができ、それによって社会を底上げするような新しい仕組みができるならば、それがコロナ禍への倍返しなのかもしれません。

引き続き、みなさまからの熱いエールを宜しくお願いいたします。

前橋にて 09

2021年7月

いつも、ありがとうございます。

今、職域接種の仕事でクリニックのスタッフといつもお世話になっている共栄堂の薬剤師さんとのワクチンチーム十数人で群馬県の前橋市に来ています。
職域接種では、長岡市の企業だけでなく、上越市、阿賀野市など新潟県全域、そして今回、ご縁をいただき、ついに県境を越えました。
職域接種に関わることは、すべて2021年6月に入ってから始めましたので、このスピード感は凄まじいものです。
当クリニックのコロナワクチン接種は、すべて医師が問診と接種をワンストップで行いますので、驚くほどスムーズです。
受け付けから接種まで1分程度です。
医師による接種は相当、みなさんに安心感と満足感をもってもらえるようで大好評です。
エールの看護師さんは捌きのエキスパート、医療事務さんはもてなしのエキスパートで、適材適所の運営をしています。
接種後のみなさんの笑顔と感謝の言葉に癒され、さらにヤル気がみなぎります。
職域接種は医療だけでなく、マネジメント力を必要としますので、当クリニックには最適です。
もし、職域接種が再開されるようでしたら、県内外とわず、関心のある企業さまは気軽にお問い合わせください。
また、現在、ワクチン供給不足のために一旦中断している個別接種に

地域医療というシステムの下に眠るエネルギーを最大限に有効利用して、長岡の価値を高め、長岡を「あたらしい地域医療発祥の地」にする、これこそが「エール長岡プロジェクト」です。
どんなに壮大なことでも進め方は同じで、イメージ、企画、実行、カイゼンをほぼ同時に行ってスピードをあげることが重要だと思います。
スピードは、緻密な仕事をするうえで必要不可欠です。
大変だけれども意思決定の回数が多ければ多いほど、正確に成長します。
割合の問題で意思決定回数が多いほど、間違った時のダメージは少なく、わずかな軌道修正ですみます。結果的に最短です。あたらしい事を進めるときは、いつもS字曲線の微分をイメージしています。
高校を卒業して長岡を出ましたが、高3の時に数学の担任から教えてもらったことがずっと役に立っています。そして、5年前に鮭のように長岡に戻ってきました。

“長岡に恩返しする”　今がその時だと思っています。

はっきり言って、地方にはチャンスがあります。
“閉鎖性”は“かのうせい”と読めばいいのです。
地方に眠るエネルギーは地下エネルギーそのものです。
そう言えば、小学校の時、長岡は原油が出るって習った気がします。
これを書いていて、僕の礎は長岡だと改めて認識しました。無類の川好きですし。
ここから、みなさまの期待に応えるべく、さらにギアをあげ、スピード全開で進んでいきますので、引き続き熱いエールを宜しくお願いいたします。

前例なきをやる 07

2021年5月

いつも、ありがとうございます。

山の天気のように目まぐるしく状況が変わる中で、常に変わらないものは何かを考えながら仕事をしています。
こうした情勢の時は、どこもかしこも分断と協調の綱引きを繰り返していくものだと思います。
瞬間的均衡の連続が推進力になると思いますし、非常事態の中、着実に前に進むためには意思決定の数が一番大事になっていくのではないでしょうか。
MBVは、2020年4月に設立ですから、まさに非常事態の中で生まれました。

起こることのほぼすべてが、“前例なき経験”です。

ですので、意思決定の数にはこだわり続けました。
もっと穏やかで安定したときに生まれたかった気持ちはもちろんあります。
でも、こういう状況の中でゼロからつくり、育てる経験はそうそうできるものではありません。
経験は一番の財産です。
根っからの前向き性質ですので、悪風の中のかじ取りを楽しんでいます。

こうした環境の中で育ったMBVは僕の想定をはるかに超える強力な組織になったと思います。
一人ひとりが組織の変わらない底流を意識しながら、それぞれの自由な考えの中、適材適所で役割を果たすことが出来ます。シナジーが溢れかえっています。

そんな感じでチームMBVは出来上がりました。
いよいよ、その運用力を存分に発揮すべきときが来ました。
コロナウイルスワクチン接種プロジェクトをスタートします。
空前絶後のコロナ禍に対して、“前例なきをやる”です。
MBVとして長岡モデルを提案しています。どこまでも前向きです。
こどもの頃に感動した「北風と太陽」、勝つのは決まって太陽なのです。
いろいろな問題に直面すると思いますが、一つ一つ丁寧にスピード感をもってみんなで乗り越え、みんなで成長していきたいと思います。

今後とも、熱いエールを宜しくお願いいたします。

倍返し 08

2021年6月

いつも、ありがとうございます。

MBVでは、2021年4月から医師4名、看護師3名、スタッフ3名が新たに仲間に加わり総勢30名となりました。
すごいエネルギーを感じながらも、ちょっと現場の隅々まで目が行き届かなくなりはじめました。予想はしていましたが、うれしさみしな気分です。春なのにです。
春は出会いの季節です。
現在MBVには10名の医師がいますが、よく「どうやって集めたの?」と聞かれます。
正直に言えば、みんな友だち、または友だちの紹介です。だから、一瞬で集まりました。
僕は個人的にSNSをしないので、今どきの友だちは少ないんです。
そして、根っからの一人っ子で友だちも多くありませんが、昔から少ない友だちを大切にしてきました。

僕の友だちは普通に10年以上、連絡を取ってない人が多いです。
10代、20代、30代とその時代ごとに一緒に過ごした友だちは最高の思い出であり最高の宝物です。
そういった意味で、友だちを大切にすることは思い出を大切にすることに他なりません。
そんな思い出や宝物が時を経て熟成し、時を超えてつながり、新しい価値をもつ、新しい価値をつくるカタチとなってあらわれたりすることはサイコーです。それがMBVなのだと思います。
ちょっと前にお友だち内閣と言う言葉がありましたが、政治はさておき、新しいことを誰かと始める時に、そのパートナーは友だちしかないと思っています。
初対面の方と出会って信用を得るには、それなりに時間がかかります。

新しいことはスピードが命です。ですから、はじまりは友だちなのです。
友だちと始めることで節約できた時間を、新しい出会いに対しての信用を得る時間にあてることが重要だと思っています。出会いはとても大切で、人生の全てといっても過言でないかもしれません。
そして、友だちが友だちを、出会いが出会いを連れてきてくれます。
出会いの時。一番、緊張する時間です。
大人の出会いは嬉しく、そして緊張します。
いろいろな出会いがあるけれど、ウレシイキモチは共通のようです。

新しい出会いを求めてMBVでは大プロジェクトを企画中です。
まだ見ぬ新たな出会いにワクワクがとまらない春なのです。

引き続き、みなさまからの熱いエールをよろしくお願いいたします。

トップメッセージ特別編　エール!長岡 06

2021年4月

いつも、ありがとうございます。

2021年4月26日ちょっと肌寒い青空のもと、駅前再開発の起工式・安全祈願祭に行ってきました。
来年秋、この地でMBVの第2弾「エール長岡クリニック」を始めます。
MBVは完全な理念先行型なので時間は本当に大切です。
圧倒的なスピード感がなければ、世の中は変えられません。
医療は誰もが関心のある普遍的分野で、まちづくりや市民生活、政治や経済にいたるまで、ありとあらゆるところに通じているので、その社会的な潜在能力は極めて高いです。
とりわけ、地方ではなおさらです。

創業期は何もないところからのスタートでしたので、ひたすらがむしゃらに無我夢中でした。
そんな中でたくさんの方々から共感、ご支援をいただき着実に成長し、核が出来たと思います。
MBVの理念は普遍ですが、成長する過程にはこれからたくさんの選択が待ち受けていると思います。
選択は自由であり、身震いするほどの緊張と責任を感じます。一つ一つ丁寧に心を研ぎ澄まして最適な選択をしていきたいと思います。
たいへんだけれども選択できることほど、幸せなことはありません。
そして、塩梅。この言葉が昔からなぜか好きです。
ニュアンスはバランスだと思いますが、個人的にはもうちょっと曖昧で趣きがあり心に響きます。まさに塩梅が良い言葉です。
創業以来、前だけを見てスピード全開でMBVを創ってきました。
目指すところはまだまだ遥か遠くですが、想定外の速さで、想定外のつながりで想定外に大きくなりました。
これからの時代に、これからの地域医療にMBVが必要であることを確信しています。
だからこそ、塩梅が必要なときだと思います。
そういう訳で、今年は塩梅を見ながら、たくさんの選択をしてじっくりとMBVを育てていこうと思います。

今年も皆さまからの熱いエールを宜しくお願いいたします。

新しい風 13

2022年3月

いつも、ありがとうございます。

数年前に初めてMBVをイメージした時、いつか行政と仕事がしたいという漠然とした目標がありました。
今、ワクチン事業の分野で見附市と新潟県と仕事をしています。
見附市とは3回目の追加接種と5歳から11歳の子供たちの接種の合計1万回を行います。初顔合わせから決定まで1週間程度とまるでベンチャー企業のようなスピード感でした。
すぐ隣にこんなすごい市があるとは驚きでした。
大ファンになりました。
新潟県とは追加接種の加速化センター長岡、そして新潟県大規模接種センター上越の仕事をしています。新潟県の医療行政のスピード感、実行力にはいつも感動しています。
今春からは、新潟県内の初期研修医の数も大幅にアップするとのことで大変うれしい限りです。
一人でも多くの研修医の先生たちが将来にわたって新潟県で活躍できるとよいなぁと思います。
6年前に僕は新潟県に戻ってきました。
その時に比べて、新潟の医療に明るい光がさしていることを実感しています。

もともとMBVは、医師偏在問題を抱えていた新潟県の医療界で新しい風を吹かせることを目的に創業しました。
最初は、まったく周りから理解されなくてなかなかな感じでしたが、地道な活動を続けていると着実に共感してくれる仲間が増えていきました。
どんな大きなことも、最初のテーブルは小さいものだし、あきらめずにひとつひとつ丁寧に実行、改善を繰り返すとやはり夢は実現できると思っています。
共鳴、共感の力はすごいです。

今日2022年3月1日に、リバーサイド千秋内にエールワクチンセンターをオープンします。
地域の、社会の、そして時代の要請にただ応えるためにつくりました。
おそらく、前例なきワクチンセンターです。
多くの関係者の皆さまに応援してもらっています。

見附市民も新潟県民ももちろんですが、やはり長岡市民から利用していただきたいです。MBVの本拠地は長岡なのです。
18歳の時、地方の閉鎖性に未来を感じれずに長岡を出ました。
経験をもつ僕としては1週間の東京生活はなかなかな感じです。
出来るかぎり、都会にいることを忘れるために会場とホテルとホテルに隣接するコンビニにしか行かないようにしています。
ちょうど、好きなタイプの日本シリーズもやってるし、缶ビールを飲みながらちょっとだけ仕事のことをあんまり考えないようにしてクールダウンしています。
それでもやはり、MBVのことや長岡のこと、地域医療のことを考えると、いてもたってもいられなくなります。ほんと、出張は苦手です。
ところで先日、MBVでは事業拡大のためにリクルートプロジェクトをはじめました。
昨今、医療者不足が問題になるなか、うれしいことに、とても多くの方々から関心を持っていただきました。特に看護師さんは、5人の募集に対して20人を超える応募がありました。
MBVを始めるときに、いつか誰もが憧れるカイシャにしたいという壮大な想いがありました。
もちろん、まだまだそんなセカイ観ではありませんが、ちょっと先を考えて目の前の目標に向かってダッシュを繰り返すと知らず知らずのうちに持続可能な、そんなセカイ観が出来ると思っています。
いよいよ、来年は医師リクルートに力を入れていきます。

地方の医師不足を解決するには、切磋琢磨が必要です。というのも、医師は子どもの頃から、競争の中でしのぎあって生きてきた人が多いのです。

良し悪しは別にして、それが医師の特徴だと思います。そして、医師免許と言う最強のパスポートを持っています。
より働き甲斐のある、より自分を評価してくれる、より挑戦できる環境にいくことは当たり前なのです。
有能なビジネスパーソンがいろいろな会社を渡り歩くことと、有能な医師がより条件や環境のよい組織に身を置くことは本質的に同じです。地方の大学病院でもよくあることです。

大事なことは、それぞれの組織が働きたいと思える雰囲気をつくり、その中で切磋琢磨する環境を当たり前にする、つまり文化にすることだと思います。そうすれば、医師は自然に集まります。

MBVは、創業1年。まさに文化づくりの真っ最中です。
有能で面白い、個性豊かな先生たちが集まり、切磋琢磨し合ってくれれば地域医療問題は必ず解決します。
理想を現実にするために、さらに緻密にスピードをあげてみんなでワクワク進んでいきたいと思います。

引き続き、みなさまからの熱いエールをよろしくお願いいたします。

選択、そして塩梅 12

2022年1月

2022年の新年、明けましておめでとうございます。

MBVの大きな見通しがついて、年末年始は久しぶりに家族と楽しく過ごすことができました。
大晦日に弥彦神社、元旦には蒼柴神社を訪れ、新たなキモチでヤル気いっぱいになりました。
明るく新年を迎えることができるのも、患者さま、ご支援くださる皆さまのおかげです。
心より感謝いたします。
本年も宜しくお願いいたします。雪が舞う極寒の神社はなぜか心が洗われる感じがして大好きです。

神社と言えば、歴史と伝統です。
学ぶことがたくさんあります。
僕にとって、歴史は失敗の本質を、伝統は継続の力を学ぶためのものです。
どちらも今のMBVに必要な教養です。
2022年のテーマは選択と塩梅です。
今年、MBVはいよいよ創業期から成長期に移行すると思っています。
おきましても、事前に長岡市内の事業所、町内会、サークルなどでの希望がありましたら早めにご相談ください。
当クリニックのワクチンプロジェクトには、たくさんの方々からご賛同、ご支援を頂いています。この度、株式会社共栄堂、株式会社北都よりご寄稿いただきました。

最後に私ごとですが、これを書いている2021年7月15日に48歳になりました。4回目の年男です。
“あっとゆーま”が正直な感想です。
これからも医療を通じて社会の底上げに少しでも貢献できるように、みんなで力を合わせて頑張りたいと思います。

引き続き、みなさまからの熱いエールをよろしくお願いいたします。

和を以ってスタンドプレー 10

2021年9月

いつも、ありがとうございます。

創業以来、少数精鋭で今の時代に最も必要なスピード感を意識しながら1年間運営してきましたが、凄まじい勢いでどんどん広がるセカイに、さすがにシナジーもあふれかえり、エネルギーが充満し、新しい仲間が必要になりました。
MBVが提案する「あたらしい医療のカタチ」実践の場として2023年9月にエール長岡クリニックの開設は決まっていますが、2025年には新潟市にエール新潟クリニックを始めようと考えています。こうした事業規模拡大のために、リクルートプロジェクト、“エールに集合”をスタートします。

僕がMBVを始めた理由は、医師の孤独さを解消することで医師不足に悩む地方に医師を集め、マネジメントとリーダーシップのスキルをもつ医師を育て地域を活性化するためです。
医師って、なぜか孤独な人が多いと思うのです。
これほど人気がある職業で、いつの時代も世の中に必要とされる分野なのに、その中心が孤独というのはなんとも寂しいです。
そんなわけでMBVに集まった10人の平均年齢41歳の医師たちは、いつも楽しそうです。
医師が楽しそうだと、必然的にスタッフはみんな笑顔になります。医療システムの中で一番大事な構造です。
MBVはめちゃくちゃ自由な風土です。年功序列もまったくありません。みんな、それぞれに和を以ってスタンドプレーで良いのです。そうした緩いスタイルで戦略的に圧倒的スピードで医療問題や医療に通じる社会問題の解決を行っています。
今回、MBVでは、全国約30万人の医師の中から新しい仲間を求めます。0.01%、30人くらいの先生たちに参画してほしいと思っています。たった0.01%の前向きな、新しいチカラで確実に地域医療は激変します。地域医療が変われば地方は変わります。地方が変われば…あっという間です。
これを読んでいる先生たちは、少なからずMBVに興味があるのだと思います。
僕が思うに医師免許は日本では最強のパスポートです。いつでも、どこでも、誰とでも働けます。その中で、今の時代はやはり誰と働くのか、誰とやるのか、そして誰と成し遂げるのかです。

MBVで、一緒に和を以ってスタンドプレーできる日を楽しみにしています。
お気軽にご連絡ください。
引き続き、みなさまからの熱いエールを宜しくお願いいたします。

憧れのカイシャ 11

2021年11月

いつも、ありがとうございます。

産業医の集中講座で東京に来ています。
ネクタイと都会が苦手で、自分探しの旅を中断し、地方に移り住んだ

たことを実感しまくっています。
その実感に対してどうしても、一度チャレンジしたくなったのです。

もうひとつは、エールホームクリニックの年間成長率3000%超の実績を生かして、全国に概念を伝える方法です。
これははっきり言えばお金がかからないし、いつでも出来ます。

今回は、著しく猛スピードで変わる医療界での新しい力、新しい価値観の広がりをひとつめの方法で実際に感じてみたいのです。
最初で最後の大型医師リクルートになるかも知れません。
2024年春、全国の個性豊かで有能な、そして同じ時間をともに過ごしたいと思える先生に出会えたらと思います。

引き続き、皆さまからの熱いエールを宜しくお願いいたします。

半年、一年、三年と。 17

2022年10月

いつも、ありがとうございます。

2022年10月8日にエールホームクリニックが2周年を迎えることが出来ました。
患者さま、応援してくださる皆さま、そして何より一生懸命働いてくれるスタッフのおかげです。心より感謝いたします。
2年前の今頃は開業したばかりで、患者さんが全くいない中、半年くらい先のことを考えていました。
本当に何もないところから始めたので、資金繰りとスタッフのモチベーションの維持に全力を尽くしていました。

当時、エールの理念は僕が想像していたよりちょっと時代が早すぎました。
自分の頭の中では100%つながっているのに、なかなか周りに理解されなくて、"ヤッちゃった感"満載でした。
チョロQは切れないギリギリまで引っ張って発射するのが一番だと自分に言い聞かせましたが、自分の力だけではどうしようもありません。
なぜか僕は若い時から人にだけはものすごく恵まれていて、ピンチになると必ず助けてくれるスーパーな人が現れます。
この大ピンチのときも、次から次にすごい人が現れ、信じられないほどの大チャンスをもらいました。
あとは全力でやるのみでガムシャラに働きました。

1年前の今頃は、仲間も増えて患者さんも増えて、1年先のことを考えていました。
ちょうど、職域接種を経験していたので、やはり次は自治体と仕事がしたいと思っていました。それが通じたのか、実際に新潟県の大規模接種や加速化センターを皮切りに、見附市、弥彦村、関川村、柏崎市と今でも仕事をしています。
やはり行政と仕事ができることは、僕が最も大切にする信用の力なのでこれ以上の喜びはありません。ご縁を大切にしたいと思います。
そして、今は3年後のことを考えています。
最近、見据える先が確実に長くなっていることに気づき、MBVがすごい勢いで成長していることを実感しました。
正直、怖いです。
僕たちはコロナ禍の中、マイナスから一つ一つ自分たちで創り上げてきたのでそれぞれの役割を皆がわかっています。
マイナスの中での創業経験がMBVのパワーの源なのだと思います。
これから新しい人材も集まり来年秋には新しいクリニックが始まります。
いろいろなものが混ざり合い新しい大きな流れが生じ、おそらく、2025年までは成長を続けると思います。
逆に言えば、現状では2025年にピークを迎えてしまうと考えています。
ピーク到来をどうやって延ばしていくか。
ヒントは足元にあるものだから、日常の生活の中で毎日、答えを探しています。

引き続き、皆さまからの熱いエールを宜しくお願いいたします。

真夏に飲むギンギンのビールも、汗を吹き出しながらのカレーやラーメンも大好きです。
そんな感じで毎日のアツさを楽しくやっています。

天候ばかりでなく社会情勢もここ数年は経験したことがない事が毎日のように起きていますが、現実なので世の中やはり何でもありなんだなと改めて感じています。
変化が激しい時に大事なことは、本質がブレないことだと思います。
平和で穏やかな時は多少ブレてもごまかせますが、こういう時代は見破られます。
逆に言えば、本物をつくれる時代なんだと思います。

さて、そんな変化の激しい日々の隙を狙って、初めて1泊2日で社員研修会を行いました。
当日は、朝7時からクリニックでほぼ風物詩化した全スタッフの大写真撮影会を行い、その後、チャーターしたバスに乗り込み、弥彦を経由して月岡温泉に行ってきました。
一応、社員研修会と称しているので、「おもてなしを学ぶ」なんてしましたが、本当のところは創業以来ずっと走り続けてきたのでちょっと一休み、パワーチャージが目的です。ズバリ、メリハリです。
もともと元気なスタッフたちはさらにパワーアップしたようです。
僕としても、実際に集団で行動してみて初めて気づいたこともあり、すぐに大好きなカイゼンができたので非常に有意義な社員旅行でした。
前に進むことはもちろん大切ですが、それよりも現状の問題点をすばやく見つけて改善することが何より重要です。
どんなこともやはり基礎力。
基礎がしっかりしていないと積み重なるわけがありません。
最近、若者へのメッセージ的なことを求められることがしばしばあります。
基礎を積み上げることだと思います。いっぱい考えて行動して経験をすることだと思います。
大変だけれども、刻一刻と変化する今は、実はとてつもないチャンスの刻です。
変化は思考、行動、経験をするにはもってこいです。
特に僕のように何もないところで生まれ育った人、つまり基礎力のない人間にとって、これ以上のチャンスの時代はないと思います。
"まずは何でもやってみよう"と、何もなかったかつての自分を思い出しながら若者たちへエールを送りつつ、やっとスタートラインに立つことのできた今の自分にその言葉を毎日言い聞かせています。

概念を広げる ―全国医師リクルート― 16

2022年8月

いつも、ありがとうございます。

新潟県内でMBVが運営するエールホームクリニックの価値、認知度は十分に高まったことを日々感じています。
感謝の気持ちでいっぱいです。
いよいよ、MBVとして県境を超えて全国に挑戦するときが来たと思います。
今回、全国からMBVの理念に共感する先生を10人募集します。

よくいろいろな方面から、どこまで事業拡大するのかを聞かれます。
MBVの社会的な役割は、新しい医療のカタチの概念を広げることです。
広げ方は2つ。
1つは理念を同じくする直営のクリニックを増やすことです。
個性豊かな先生たちが、根っこでつながり同じ方向を向いていることが重要です。ですので、人材は全て常勤かつ自前で集めなければなりません。それが出来続ければ、クリニック事業としての拡大は続くし、その力でMBVの概念を広げることができると思います。
ただ、これには時間もお金もかかるし、かつ伝統的な医師という職業の壁があります。一方で、最近は新しい考えをもつ医師が一気に増え

42歳の時、今度は逆に地方の閉鎖性こそが大チャンスと気づき舞い戻ってきました。
長年、変わらなかったところには果てしないエネルギーがたまっています。
いつの時代も新しい風には多少の摩擦はつきものですが、それ以上にむしろ向かい風は上昇気流を生み出しますし、そして何より新しく本当に良いものなら自分の想像をはるかに超える、仲間という追い風が現れます。
そして、誰にとっても当たり前の存在になれば自然に摩擦は消えると思うのです。それはいくつもの歴史が証明しています。
地方は超絶面白い、なぜならチャンスがあるから。
今、僕が一番思うことです。

引き続き、皆さまからの熱いエールを宜しくお願いいたします。

原点 14

2022年4月

いつも、ありがとうございます。

4月1日はMBVにとって、特別な記念日です。
2年前の今日、つまり2020年4月1日にアオーレ長岡で磯田達伸長岡市長と共同記者会見をしました。
MBVが世に出た瞬間です。言わば、原点です。
当時は医療法人が設立したばかりで、クリニックも始まってなく実体がありませんでした。あるのは、理念と企画と情熱と若い医師集団だけでした。
そんな状況の中、MBVの真の価値を理解し、大チャンスを与えてくれた長岡市、磯田長岡市長には感謝しかありません。
医療業界はいろいろと大変なようで、そこを短期間で調整して共同記者会見を行った覚悟は凄まじいことと思います。
会見の前日には長岡市の医療行政のトップ自ら、当時現役の長岡市医師会長のところに僕を連れて行ってくれ話をまとめてくれました。
圧倒的な実行力とスピード感です。
やはり、長岡市は心底、新しいことやイノベーションが大好きな街だと思います。

あれから2年、僕たちはその勇気とその期待に応えるべく全力で考え、知恵を絞り出し、行動してきました。
エールホームクリニックの運営を通じて、多くの事を経験し、さまざまなカイゼンを繰り返してきました。
あまりに多くのことが変わったけれども、その底に流れる概念は2年前と1ミリも変わりありません。
MBVの第二弾であるエール長岡クリニックは、この激動の2年間で得た全ての英知を詰め込み、さらに広がり続ける共鳴、共感の力で進化しまくります。
長岡市民の皆さまの生活を支え、また新しい街づくりのための存在になると確信しています。
本物には時間がかかります。もう、しばらくお待ち頂ければ嬉しいです。
全力で楽しくワクワク頑張ります。
引き続き、皆さまからの熱いエールを宜しくお願いいたします。
追伸
今回は改めて「原点」ということで、2年前の長岡市との共同記者会見をノーカットで公開します。ちょっと恥ずかしいですが、かなり面白いのでぜひぜひご覧ください。
13分40秒あたりと26分17秒あたりで、記者の質問に対して磯田市長がコメントしています。
※動画のQRコードはP.10から、2022年4月の「原点」を参照

スタートライン 15

2022年7月

いつも、ありがとうございます。

長岡も梅雨明けしました。毎日、暑いです。

チャンスは一瞬 20

2023年4月

いつも、ありがとうございます。

この4月でMBVは創業3年を迎えました。
いろいろありましたが、過ぎ去ってみればあっとゆーまで楽しく充実した日々でした。

このままでは先が見えない地方都市において、若い思考、行動で稼ぐことの必要性を、もっとも伝統的な医療界から広めるために取り組んできました。
高校を卒業するとき、長岡が嫌で嫌で堪らなくて、ただそれだけで東京に行きました。
紆余曲折を経て、7年前、ひょんなことから二十数年ぶりに長岡に戻ってきました。変わらずに閉鎖的なままで居続ける長岡をみて、自分で変えようと思いました。
若い人たちが、働く所がないとか魅力がないからではなく、視野を広げ大きく成長するために、後ろ髪を引かれながら一度離れる。長岡をそんな街にしたいのです。

今年の1月16日には、渾身の勝負手として日本経済新聞に、やはり閉鎖的すぎる医療界に対する想いを意見広告しました。
医療は誰もが関心のある領域だからこそ、フェアであるべきです。

いわゆる既得権益とは縁のない領域であるべきだと思っています。
常に切磋琢磨と健全な新陳代謝が必要です。

そうした想いに日本経済新聞が共感してくれたのか、月曜日の4面掲載という快挙となりました。

今、社会がMBVを必要としていると確信しました。
そして、この想いは経済界にも届いたようです。
東証プライム上場企業の創業者から、情熱のこもったエールと計り知れない支援をいただき、さらに、世界を相手に仕事をしてきたハイパーなビジネスマンが、東京から長岡に来ることになりました。
やはり凄い人はオーラと行動力が違います。

今、MBVでは同時多発的にいろいろなことが起きています。
集まるチカラの大きさもスピードも桁違いになりました。
明らかにステージが変わったのだと思います。
MBVは、過去にしがみつかず、新しい世界に挑戦していきます。
世界は変わり続けますが、チャンスは一瞬です。

引き続き、皆さまからの熱いエールをよろしくお願いいたします。

歴史、伝統ある大学と革新的なクリニックが500キロの距離を超えて、今の時代に必要な新しい医療のカタチを試行錯誤しながらともに創ろうとしています。
新しいことを口にする人はたくさんいますが、口に出すことと実際に行動することは、全く別物です。
大学とクリニックって違うでしょって頭だけで考えたらもう何もできません。
まずはやはり、やってみるです。
同じような人や組織ばかりが集まっても何も生み出しません。
それぞれ違って根っこがつながっていればそれで良いのです。

医学部が冒険せずに平均化したら、医学の進化は望めないし有能な人は大学には残りません。
だってそんな環境は単純につまらない。
堂々とみんなで冒険を、競争を楽しむのが一番です。
いよいよ、弘前大学一筋の中野先生が皮膚科の教授選にでるようです。
歴史的に多くの異端を生み出してきた弘前の街に、令和の異端教授が誕生することを願っています。
頑張れ、はじめちゃん。

コロナはあらゆるものを壊し、考え方を変えました。
これから、日本の医療システムはもの凄いスピードで変わっていくと思います。
そのスピードについていけないところは淘汰されるんだと思います。
ここは踏ん張りどころと、いつも自分を鼓舞しています。

引き続き、皆さまからの熱いエールをよろしくお願いいたします。

抗い、渦を巻く 18

2023年1月

明けましておめでとうございます。
本年もよろしくお願いいたします。

激動過ぎた2022年をなんとか乗り越え、2023年を迎えることが出来たことが素直に嬉しいです。それくらい2022年はギリギリでした。
この閉塞感とがんじがらめのルールの中で、最大限の成果を出すことは本当に至難の技です。
汗水流して頑張ってくれる有能なスタッフ、力強く支えてくださる皆さまには感謝しかありません。心からありがとうございます。
体力だけが自慢の僕も年末は電池が完全に切れて、弥彦の温泉でキズを癒し、大晦日の弥彦神社、元旦の蒼紫神社で御祈祷しパワー注入しました。

2023年はどんな一年になるのか。
やはり、差がつく一年になると思います。
格差社会というよりは、同じ業界で差がつくのだと思います。
コロナ禍も4年目。
おそらく、医療界は差がつくど真ん中です。
社会を進めるために頑張っているので、うさぎのように跳ねたい気持ちはもちろんありますが、現実的にはなかなか社会を明るくする材料は少なく、閉塞感の漂う一年になるのではないでしょうか。
閉塞感に押されてしまうところと、戦略的に抗い、打破しようとするところでは天と地ほどの差がつくと思います。
僕は自分の頭の中でつながらないことは100%やらないことにしています。
失敗上等を前提としたチャレンジはしません。
200%成功するように万全の準備を行い、取るべきでないリスクはないかをいつも考え必ずイケると確信して、そして覚悟を決めたことにのみオールインします。創業経営者ですので、最終的な決断は当然にすべて自分でします。

今年は秋に2件目のクリニックが長岡駅前で始まります。
長岡市との初折衝からまるまる3年以上かけて、ようやく最終段階まで来ました。
全国的にも唯一無二の新しい医療機関になると思います。
ちなみに、おかげさまでエールホームクリニックの知名度がとんでもなく上がりましたので、名称は「エールホームクリニック長岡」にしました。
2023年、MBVはエールホームクリニック、エールホームクリニック長岡、エールワクチンセンターの3施設を運営します。
当然ですが大好きなシナジーが出て、渦を巻くと思います。

あらゆるものを吸収して、大きく巻き込みながら成長していきたいと思います。
いよいよMBVの終わりなき旅が始まります。
本年も、皆さまからの熱いエールを宜しくお願いいたします。

頑張れ、はじめちゃん。 19

2023年2月

いつも、ありがとうございます。

1月21日大安に毎年恒例のMBV医師新年会を行いました。
弘前大学から、親友でMBV監事の中野創先生も参加してくれました。
MBVの終わりなき旅の始まりを感じることのできた感動的な新年会でした。
弘前大学は、僕を含めて3人の医師の出身大学であり、また同学の皮膚科学講座とは遺伝子診断で共同事業をしています。

長岡に スーパードクターが集結する
医療法人メディカルビットバレーの挑戦

深刻な医師不足の本県で、信じられない現象が起こっている。長岡市内で新しく開院したクリニックに、全国から続々と著名なドクターが集結しているという。同市内の再開発事業で整備される「米百俵プレイス（仮称）」に開院予定のクリニックでは、10人の医師が診療に当たる予定だ。一人の医師による既存の枠組みを突破したチャレンジが、奇跡ともいえる事態を呼び込んだ。

長岡のシンボル、「米百俵プレイス（仮称）」で開院へ

20年4月、アオーレ長岡で、同市の磯田達伸市長や同年同月に設立された医療法人メディカルビットバレー（MBV）の理事長で、内科医の澁谷裕之氏らが会見した。現在、同市では中心市街地の再開発事業が進行中。そこで整備される「米百俵プレイス（仮称）」に、この医療法人が「エール長岡クリニック」を開設するという。

場所は北越銀行の駐車場だった場所（C街区）で、新たに建設される5階建て駐車場棟の1階部分、約2千㎡。CTやMRIなどの医療機器や手術設備を備え、内科、小児科、皮膚科の医師が連携をとって診療にあたるという。開院予定は22年春。

「特殊なものを除き、検査はすべてその日に診断がつくシステムです。たとえば血液検査なら60分以内に終わり、検査結果を聞きに再度来院する必要はありません」

（理事長の澁谷裕之医師）

平日の診療時間は午前9時から午後9時で、日曜も診療する予定。MBVでは、既に20年10月8日、長岡市下柳に「エールホームクリニック」（内科、リウマチ科、写真）の開設を終えている。22年春の市街地中心部での開院時点では、10人の医師が2カ所のクリニックで診療にあたる予定だという。

「実際はもう少し医師の数が多くなると思いますが、現時点では10人です」（同）

長岡市ではクリニックの開設が予定される「米百俵プレイス（仮称）」に、人づくりと産業振興を総がかりで支える地方創生の拠点として「人づくり・学び・交流エリア」を整備する。「米百俵プレイス（仮称）」は、「産業界のイノベーションを促進する4大学1高専の拠点」として「産業基盤の強化・新技術開発」の機能も期待されている。

▶医療法人メディカルビットバレーの理事長、澁谷裕之医師

一方、MBVではクリニック事業のほかに、「AI自動診断で未来医療を創造」として「AI開発・商品開発事業」を掲げている。例えば「人口知能（AI）を搭載した医療用カメラの開発をクリニックと連携して行い、皮膚疾患の自動診断を目指します」という。「エール長岡クリニック」の開設が、医療にとどまらず、地元産業界のイノベーションや新技術の創造に結びつくことが期待される。

日本初の〝シナジー診療〟

「エールホームクリニック」などの組織体制を解説するのは極めて難しい。あえて言えば、かつてのITベンチャーといったイメージだ。有名な「チームラボ」は01年にプログラマー、エンジニア、数学者、建築家、絵師、ウェブデザイナー、グラフィックデザイナー、CGアニメーター、編集者らによって東京都内で設立された。まさに各分野のプロフェッショナルが集まり、当時は傍目で何をやっているのか分からないような企業だった。

「エールホームクリニック」の在り方は「チームラボ」に近いというが、こうした組織体制の話はひとまず後段に譲る。

長岡市下柳にある医療法人メディカルビットバレー（MBV）の「エールホームクリニック」は20年10月に開院。同クリニックは二人の医師により、内科、リウマチ科の2診療科でスタートした。21年4月からはそこに皮膚科、小児科、アレルギー科が追加され、医師がさらに4人加わって6人体制になる見込みだ。

22年春には市街地中心部の「米百俵プレイス（仮称）」に、「エール長岡クリニック」を開設する予定。この段階で10人、あるいは10人プラスアルファの医師が二つのクリニックで診察に当たる予定だ。

これらクリニックでの診察の在り方が極めて特徴的だ。

「例えばアトピーの子どもがいたとします。最初は小児科で診ることになるでしょうが、難しければ皮膚科で診ます。皮膚の病気は内臓の疾患からくることもありますから、そうした場合は、その場で別の専門医の先生がすぐに診る。

小児科にかかるのは風邪などの感染症が多いわけですが、親も具体が悪いことが多いですから、内科の医師が一緒に診ることもできる。いくつもの医療機関を受診せずとも1カ所で診ることができる。しかも医師同士が互いに仲がいいので、スムーズにいく。これを勝手な造語ですが、〝シナジー（相乗効果）診療〟などと言っています」

（理事長の澁谷裕之医師）

総合病院にかかったとしても、同じ日に別の診療科で診てもらうことはまずできない。

「一人に負担をかけないということです。主治医が一人でずっと診るとなを不幸にしてしまいます。まず継承できなくなる。一人だけで診るのではなく、たくさんの人で診ることによって、標準的いうのは、ある意味でみんなで今の新しい最適な医療を提供できるようになります。主治医制をとらず、全員で診ていくということです」（同）

22年春に開院の「エール長岡クリニック」では、診療時間を朝9時から夜9時までの12時間とする予定だという。

「仕事を休んで受診しなくて済みます。例えばワクチン接種なども12時間のうちで、どこでもできるようにします。学会などで糖尿病や高血圧なども早期に受診するようにと言っていますが、現実は働いている人たちが受診できる時間がほとんどないわけです。それを実際に実行できる体制にするのが、私たちの考えです」（同）

こうした医師同士が連携した〝シナジー診療〟、働く患者側に寄り添った診療時間といった体制のクリニックは、意外なことに今まで国内になかったという。

「医療は恋愛や青春と同じ」

医療法人メディカルビットバレー（MBV）では前出のクリニック事業やAI開発・商品開発事業のほか、人材育成や女性医療従事者の登用・支援などにも取り組むという。

「この医療法人はまったく血縁関係がなく、みんなが友だち関係なんです。そうした意味で、しっかりと次の世代に渡していかなくてはならないという大前提があります。そのためには様々な人材を育てていかなければなりませんし、医療ですから自分たちのところで医師も育てていかなければならないと考えています」

（理事長の澁谷裕之医師）

MBVのクリニックでは小児科や皮膚科といった診療科を開設している。

「小児科や皮膚科は女性の医師が多いんです。今、女性の医師は全体の3分の1を超えるくらいまで増えています。新潟大学ではおよそ半分ですね。女性の医師が結婚、出産した場合、専門医を維持できなくなってしまいます。医師の世界は男社会でもありますからね。

国公立大学で医師を養成するため、国が出す費用は学生一人当たりで1億円とも言われています。それが失われる、あるいは捨てさせるような事態は無駄としか言いようがありません。女性の医師が活躍していただけるような環境をつくっていくことも人材育成だと思っています」（同）

MBVの理事長である澁谷裕之医師は「世の中の興味として、医療は恋愛や青春と同じようなものだ」と言う。

「普遍的なテーマがいくつかあって、その一つに医療や健康があると思っています。医療を通じていろんな問題を解決していきたいと思っていますが、社会の問題の中でも、医療とつながっている部分を最初にやっていこうということです」（同）

一般の目からすれば、医師の世界や医療は、興味はあるものの「別世界」といった存在だ。

「それを（一般目線と同じところまで）持ってきて、社会全体として取り組んでいくというスタンスです。そうすると世の中の人が共感してくれるし、なるほどと思ってくれるんです。

もともと医師はなりたい職業の1位、2位ですから、みん好きだし、医師を尊敬してくれているんです。だけど（一般からすれば）ちょっと遠い存在です。それを医師が〝みんなでやろう〟という姿勢を見せると、周囲が自然と押し上げてくれるわけですね。それを目指しています」（同）

スーパードクター集結

医療法人メディカルビットバレー（MBV）の理事長である澁谷裕之医師は長岡市の生まれで弘前大学医学部の出身。元長岡赤十字病院総合診療科副部長だ。

「共感してしてくれる先生とともに、ここ（エールホームクリニック）で小児科、皮膚科、内科、そしてもともとは24時間、365日の訪問診療をやるつもりで開業したんです。そしたら思ったより一緒にやりたいという先生たちが出てきたんですね」

（理事長である澁谷裕之医師）

前述のように、当初は2人だった医師が、21年4月には新たに4人加わって6人、22年春には10人の体制になるという。しかも県内外から集結してくる医師が、いわゆるスーパードクターで鉾々たる面々だ。例えば有名総合病院の部長、大学の講師やエース級のドクター等々。中には開業医を辞め、MBVの勤務医となることを望んでやってくる医師もいるという。

「もう受け入れきれず面接を中止している状態です」（同）

深刻な医師不足の本県にとって、信じられない現象が起こっている。例えば県立病院の場合、元知事の時代に魚沼基幹病院をスタートさせた。その結果はどうだったのか？

少なくとも「医師の募集を止める」というような状況ではなかったはず。市町村などでは大学の医学部に寄付講座を設置し、いわばその見返りに医師を派遣してもらうような状態が続いている。それなのに、なぜMBVでは〝奇跡〟のような状態が起こっているのか？

「医師は数じゃないんです。性格がちゃんとした、やる気のある医師によるごく少数精鋭にすべきなんです。私たちのような考えの医師はたくさんいるのですが、目立たないんでね。

そんなところに、はっきりと言ってしまうと、私のような存在が出てきたものだから、〝やれるんだ〟と共感を持って集まってくれるんだと思います」（同）

MBVのクリニックには、医師の世界にありがちな上意下達的な関係がない。

「医師の世界はどうしてもヒエラルキーがありますが、今の世代はフラットな関係と申しますか、仲間同士で年齢の違いがあっても役割分担をしながらやっていこうという人が多いのだと思います」（同）

MBVのクリニックでは医師や看護師、さらに医療事務も加わって、実にフラットな関係が築かれているという。長岡に集まる医師の家族も、基本的には長岡に移住する。

「ほとんどの医師は患者に喜ばれるところでやりたいんです。だから長岡でもどこでもいい。それをどのようなメンバーでやるかなんです。一人でやるには限界がある。私たちはシナジー（相乗効果）を出すべく、10人いるなら20人分働こうと言っています。

医師という資格だけを重要視しているわけではないのです。それ以上に人間性を大事にしています。そうじゃないと（組織がフラットにならないんです。ここで働きたい医師が来てくれればいいんです」（同）

MBVのクリニックに医師が集まる理由は意外とシンプルのようだ。「ここなら本来の医師としての仕事が伸び伸びと楽しくやれる」、そんなことではないのか。スーパードクターがここに集結するのは〝奇跡〟のような状態ではなく、医師のあるべき姿がここにあるというだけのことかもしれない。

医師や看護師らがともに使用する休憩室

2021年1月号〈財界にいがた〉掲載

長岡市 エールクリニックが挑む メディカルレボリューション（医療革命）

2年前に開業した長岡市のエールホームクリニックだが、長岡市の中心市街地で整備が進む「米百俵プレイス」に進出し、来秋の開業を目指している。医師不足は深刻の度を深めているが、このクリニックでは医師が飛躍的に増えている。そして新しく全国に向け医師のリクルートを開始した。エールホームクリニックが確立しつつある新しい医療のスタイルが注目されている。

エール、まちなかに進出

8月26日、アオーレ長岡で「米百俵プレイス北館」に進出する事業者の協定締結式が行われた（別掲記事）。「米百俵プレイス」はJR長岡駅から西に伸びる大手通りの北側で進む再開発エリアの総称だ。その名はこの地に「米百俵の精神」から生まれた国漢学校があったことに由来する。

再開発エリアには共同住宅や権利者の店舗で構成される「プレミスト大手通」のほか、「米百俵プレイス西館・東館」、さらに駐車場やメディカルゾーンとなる「米百俵プレイス北館」が整備される。

5階建ての「北館」は2階から上が駐車場で、1階フロアで最も広い面積を占めるのがエール長岡クリニック（医療法人メディカルビットバレー：MBV、澁谷裕之理事長）。

2年前、市内に開設されたエールホームクリニックが、まちのド真ん中でも診療を開始する。

〈内科、皮膚科、小児科を含む総合診療科が診療の中心となり、『まずはエールへ』の理念のもと働き盛りの会社員やそのご家族が仕事帰りや学校帰りでも立ち寄ることができるなど、皆さまのライフスタイルに合わせ夜間までの診療を行う予定にしています〉（MBV、エールホームクリニックのHPより）

エール長岡クリニックを含む「北館」1階のテナントは来秋のオープンを目指すという。

調印式で磯田達伸市長はこう述べた。

「医療法人メディカルビットバレーから『長岡発の新たな医療環境づくり』を着実に実践していただいています。14万回を超えるワクチン接種に加え、発熱外来やPCR・抗原検査にも積極的に取り組んでいただいています。

常勤医師も6名から9名に増員され、さらに全国リクルートを開始されたと伺っており、米百俵プレイスが目指す、人材育成によるまちづくりに積極的に取り組んでいただいているところです。

これまで実践してきた医療イノベーションの取り組みをこれからますます進化していただけることを期待して、最大限のエールと支援を行っていきたいと思います」

募集条件に総合医マインドとチームワーク

磯田達伸市長が賛辞と〝エール〟を送ったメディカルビットバレー（MBV）だが、10月8日、エールホームクリニックが開院2周年を迎える。当初、2人の医師により、内科、リウマチ科の2診療科でスタートした。その後、皮膚科、小児科、アレルギー科が追加され、医師が4人加わって6人体制になった。そして現在は医師が9人。

これほど医師不足が叫ばれている中で、このクリニックでは医師がほとんど加速度的に増えている。まさに奇跡と言うほかない。前出、磯田達伸長岡市長が紹介しているように、MBVではさらに医師のリクルートを開始したという。

エールホームクリニックのHPには、「ドクターリクルート」の募集概要として、以下のような内容が掲載してある。

〈当法人はすべての職種で少数精鋭の運営をしています。年功序列はまったくなく、チームワークと実力主義で高額報酬を実現しています。

9人の常勤医師の平均年齢は41歳（2022年8月現在）で、総合内科専門医、小児科専門医、皮膚科専門医、リウマチ専門医、アレルギー専門医、レーザー専門医、腎臓専門医、透析専門医、家庭医療専門医、がん治療認定医、プライマリケア認定医の資格を有し、専門的な外来診療を行っています。子育て中の2人の女性医師も大活躍しています〉

募集人員は10人だという。募集の条件には年齢や性別の記載がない。募集期間や診療科などはさておき、募集の条件で示された以下の項目がユニークだ。

〈・総合医マインドを持つ方・チームワークを大切にする方　・医師として6年以上の実務経験　・常勤医のみ・子育てなど個人的な事情による短時間常勤は、上記条件で大歓迎です〉

「とりあえずエール」

これほどの医師不足の中、エールホームクリニックでは、ほとんど加速度的と言っていいほど着実に医師が増えている。ここが同クリニックの不思議なところであり、核心的な部分でもある。「実はこれほど医師がいるのですが、これまでリクルートをやったことがないんです」（メディカルビットバレー、澁谷裕之理事長）

エールホームクリニックの場合、「医師不足」を経験したことがない。

「医師がいなくなれば、それはそのまま経営を直撃してしまいます。そのため何がなんでもリクルートしなければという話をよく聞きます。そんな時には人材派遣会社から派遣してもらうことが多いようです」（同）

医師がいない医療機関など考えられない。医師の確保を人材派遣に頼っているようでは、医療機関の存在そのものを他人に頼っているようなものだ。

「医療機関は医師がエンジンですから、医師の確保を、元栓をひねるようにコントロールされてしまうということであり、それは一経営者としていやだと、ずっと思っていました」（同）

やや横道に入るが、エールホームクリニックは開設当初から順風満帆だったわけではない。当初は医療部門に強いゼネコン関係者が、「あそこは客がいませんよ」と、こっそり本誌に教えてくれたほど。

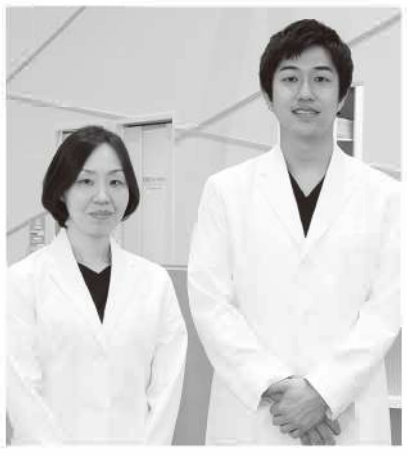
澁谷理事長は過去にこう語っていた。

「（一昨年）10月に開業し、年が明けて1月、2月でも1日の患者さんが4人、5人で、医師やスタッフの数が多いという日もありました。患者はいない、お金はない、当時は信用もなかったわけですから、何もないどころか、マイナスから始めたようなものです」

今は60台以上確保されている駐車場が満杯になり、さらに駐車場の警備員を常時配置せざるを得ないような状況になった。それはクリニックの開設とほぼ同時期に国内を襲ったコロナ禍の中で、コロナ対応に徹底して注力したことが評価された結果でもある。

冒頭、長岡市の磯田達伸市長がエールホームクリニックでのワクチン接種回数を14万回超と紹介していた。これでも民間のクリニックとしてギネスものと言われるほど。9月21日現在では15万回超となった。これらはすべて医師が打った数で、内科医である澁谷理事長の接種回数は3万回を超えている。

医師が全力でコロナ対応に当たったことのほか、澁谷理事長が強調する医師同士による「シナジー（相乗）効



▲エールワクチンセンターのセンター長、田村真麻医師（左）と鈴木竜太郎医師（右）

2022年10月号〈財界にいがた〉掲載

果」が評価されたことでもある。「シナジー（相乗）効果」とは、例えば皮膚科や小児科など、それぞれの専門医である医師が、チームで患者を診るスタイルによって得られる効果のこと。

「シナジー診療」について、まだ開業する前、澁谷理事長はこう語っていた。「例えばアトピーの子どもがいたとします。最初は小児科で診ることになるでしょうが、難しければ皮膚科で診ます。皮膚の病気は内臓の疾患からくることもありますから、そうした場合は、その場で別の専門医の先生がすぐに診る。

小児科にかかるのは風邪などの感染症が多いわけですが、親も具合が悪いことが多いですから、内科の医師が一緒に診ることもできる。いくつもの医療機関を受診せずとも一か所で診ることができる。しかも医師同士が互いに仲がいいのでスムーズにいく。これを勝手な造語ですが、〝シナジー（相乗効果）診療〟などと言っています」

「シナジー（相乗）効果」は医師だけのものではない。

エールホームクリニックでは新型コロナのワクチン接種について、すべて自前のスタッフで実施した。予約のノウハウを生かし、旅行会社が医療機関でワクチン接種の事務を受託していることもある。

エールホームクリニックでは、こうした事務的な部門を含め、一から立ち上げた。アウトソーシングも医療コンサルもゼロで実施することで、経費を抑え込むこともできる。ドクターや看護師、あるいは医療事務などのスタッフがタッグを組んで、すべてを自前でこなすことで、「シナジー効果」が生じ、医療の質も高まる。そんな好循環が生まれたという。

2年間のこうした努力がエールホームクリニックに対する信頼感を醸成し、「まずはエールへ」の理念につながったようだ。くだけた言い方をすれば、ちょっと体調がすぐれなければ、「とりあえずエール」ということだ。

かくして「1日の患者さんが4人、5人だった」というエールホームクリニックに患者が集まるようになった。それは「エールスタイル」の医療が受け入れられたことであり、ニーズがあることが証明されたことでもある。

企業理念で医師をリクルート

話を医師のリクルートにもどしたい。医療機関にとって医師確保はまさに死活問題だ。例えばこれを人材派遣会社に委ねているとすれば、生殺与奪の権を他者に預けているようなものだ。

冒頭に紹介したように、メディカルビットバレーではエールホームクリニックに続き、まちなかの「米百俵プレイス」で新しく「エール長岡クリニック」が開業を予定している。

「（いわばエールスタイルが）ニーズがあるし、これから（事業を）大きくしていかなければならない時に、医師はすべて自前で集めなければ、自分たちの企業理念に共感してくれる人を全国から集めなきゃダメなんだと気づいたんです」（メディカルビットバレー、澁谷裕之理事長）

食糧や半導体の原料を大国に握られているようでは、大国の軍門に下らざるを得ない。やはり食糧や資源は独自で確保しなければならない。メディカルビットバレー（MBV）による医師確保は、いわば食料安保のようなものだ。

「いい医師を集めることができれば、ほかの医療機関だって注目することになると思います。そして自分たちもそのように医師を確保していかないと差がついてしまうと思うはずなんです。それは互いに切磋琢磨するということですよね。

そうすることによって、働く人も職場もよくなって、医療の底上げを実現していくということです。医療は様々な分野とつながっていますから、結果として社会全体も良くしていくことが大事だと思います」（同）

先に紹介したように、MBVによる医師のリクルートには〈総合医マインドを持つ方〉、〈チームワークを大切にする方〉といった条件があった。

「医師免許を取ってしまうと、ある意味でみんな平等みたいな感覚があったのですが、医師は受験勉強とか一生懸命にやってますから、もともと競争が好きな人が多いはずなんです。医師免許を取ってしまうとゴールみたいな感覚の人も多い印象もありますが、そうではなくて、免許を取得してからが本番で、そこからどのようにいい仕事をしていくかなんです。

そのためには個人の持ち分はあるけれど、チームワークがあって、いい仕事をみんなでやろうという気持ちが大事なわけです。そうしたことが分かるいい医師を全国から集めたいと思っています」（同）

〈子育てなど個人的な事情による短時間常勤も大歓迎〉だという。「大歓迎」といった文言が入る医師の募集要項など、ちょっと見たことがない。

「短時間常勤にもこだわっています。女性の医師はとっても増えていますが、医師の世界がやはり未だ男社会ということもあり、育児や何やらでキャリアを失う人も多いと思います。

そうではなくて、本当に有能で、チームワークがあったら時間なんて関係ないんですよね。日中2時間、3時間でもかまわない。いろんな働き方があるということを広げていくことが大事で、それが私たちのやるべきことではないかと思っています」（同）

〈総合医マインドを持つ方〉という医師募集も極めて珍しい。

「専門のスペシャリストであることはすごくいいことなんですが、それになる前にはまず受け口が広くないと。例えば赤、青、黄など、水の入ったバケツに原色を落とすとモヤっとした感じになりますね。そうした色が混じり合った感じが、まさに総合医マインドです」（同）

総合医とは決して「何でもやれます」ということではないという。

「まずは受け入れられることをチーム全体でやることが大事なんです」（同）

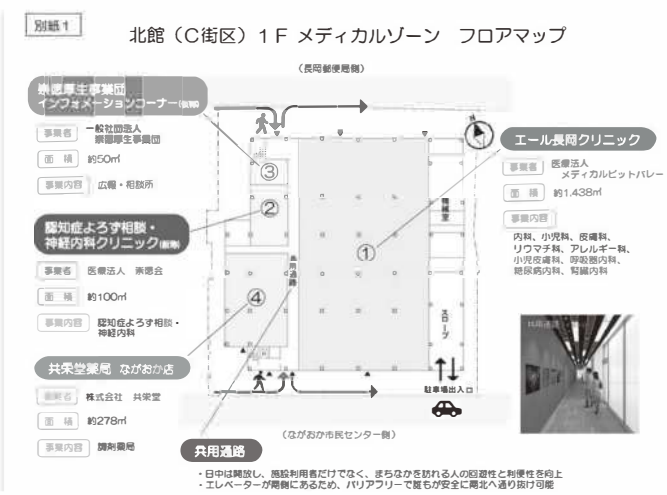
スポーツで言えばラグビーのようなイメージかもしれない。ラグビーはスクラムを組むフォワードと、ボールを展開してトライを決めるバックスに大別される。フォワードやバックスの中でもそれぞれポジションがあって専門性がある。

だが時として本県出身の稲垣啓太選手のようなゴツいプレーヤーがボールを持って走り、トライを決めることがある。それぞれの専門性はしっかりキープしながら、「一人はみんなのため、みんなは一人のため」に頑張る。それがラグビーで、あたかもエールホームクリニックのようだ。

2年間にわたるエールホームクリニックの軌跡と、これからのチャレンジがいかに新しい医療のスタイルを提案するものか、次号以降で詳述したい。

▲「米百俵プレイス北館」の進出協定締結式
（左から3人目が医療法人メディカルビットバレーの澁谷理事長）

▲「米百俵プレイス」の建物配置図（長岡市の報道発表資料より）



▲「米百俵プレイス北館」1階テナントの配置図
（長岡市の報道発表資料より）

2022年10月号〈財界にいがた〉掲載

長岡から発信 エールホームクリニックが挑む〝医療革命〟の新地平

1月、日経新聞の4面全面を使った医療法人メディカルビットバレー（澁谷裕之理事長）の意見広告が掲載された。医療を、そして地域を、さらに世の中を変えようという同法人の意見広告に反響は大きく、それが新しいビジネスの呼び水となっている。10月、長岡市内の「米百俵プレイス」に新しく「エールホームクリニック長岡」が開院を迎える。澁谷理事長が主導する〝医療革命〟は、創業期から成長期に入った。

あれから3年9カ月

新型コロナウイルス感染症の位置づけが「5類」に移行したのは5月8日のこと。3年以上も続く国のコロナ対策は大きな転換点を迎えた。その2日後の同月10日、長岡市にある医療法人メディカルビットバレー（MBV）の澁谷裕之理事長は、同市の中心市街地で建設が進む再開発事業、「米百俵プレイス」での開院に向け、建物の所有者となる特別目的会社との間で最終的な賃貸借契約を終えた。

この秋、「米百俵プレイス 北館」の1階（床面積約1，400㎡）に、新しく「エールホームクリニック長岡」が開院する予定だ。

「長岡市から（米百俵プレイスへの進出について）初めてお声がけいただいてから、ここまで来るのに3年9カ月かかりました」（澁谷理事長）

MBVの設立は20（令和2）年4月で、長岡市からの打診はそれより前、まだ法人としての実態がなかった段階でのことだった。同市とMBVが「『エールホームクリニック長岡』開業共同記者発表」を行ったのは、MBVが医療法人として設立認可される直前の同年4月1日。

記者発表には長岡市の磯田達伸市長らとともに、澁谷理事長を含む5人の医師が出席した。当日の資料には〈（MBVのプロジェクトに）参画する医師は10人〉とあった。その10人で県内出身者は同理事長のみ。記者らとのやり取りで、同理事長は「東京、神奈川、東北から長岡に医師が集まる」と説明した。しかも「スーパードクター」とも言うべき専門医の面々だ。

医師不足が深刻化する中で、県外出身の医師が9人も新たに長岡に集結することについて、磯田市長はこう述べている。〈驚きです。澁谷先生を中心に多くの若い医師が全国から長岡に来てくれるというのは、素晴らしいと感じます。また、チーム医療という、今までなかった新しい取り組みが、長岡でスタートするということも本当に光栄に思います〉（長岡市・関係団体共同記者発表要旨より）

医療法人の設立から半年後の20（令和2）年10月、長岡造形大学から北東へ500メートルほどの同市下柳に、新しくエールホームクリニックが開院した。「新しい医療のカタチづくり」を目指すMBVにとって初となる実践の場で、病院並みの医療機器を導入し、複数の診療科を擁する大型の複合クリニックだ。

「好きな仲間と好きな場所で楽しくワクワク仕事して、サイコーの業績をあげる！」がMBV、そしてクリニックの合言葉。常勤医師2人、スタッフ15人からスタートし、現在は平均年齢が41歳の常勤医師が9人で、スタッフ51人という大所帯になっている。

そして10月6日、第2弾の拠点となる「エールホームクリニック長岡」が市街地のド真ん中、「長岡版イノベーションを推進する拠点」と位置づけられる「米百俵プレイス」で開院の予定だ。〈内科、皮膚科、小児科を含む総合診療科が診療の中心となり、『まずはエール』の理念のもと働き盛りの会社員やそのご家族が仕事帰りや学校帰りでも立ち寄ることができるなど、皆さまのライフスタイルに合わせ夜間までの診療を行う予定にしています〉（MBV、エールホームクリニックのHPより）

保険収入、2千%増

5月10日、契約後の記念写真は別掲のよう。関係者は全員が笑顔でVサインだ。笑みがこぼれるのは無理もない。前述の如く「『エールホームクリニック長岡』開業共同記者発表」が行われたのは医療法人の設立直前で、エールホームクリニックの開院前だった。理念や戦略はあって医師も集まったが実績はない。極論すれば、第2弾の拠点である「エールホームクリニック長岡」が開院を予定する「米百俵プレイス」の完成を待たず、破綻してしまう可能性だってあった。

実際、当初は周囲がはらはらするような状況だった。エールホームクリニックが開院した20（令和2）年10月、この月の患者数は100人。月に25日稼働として1日に5人かそこらだ。スタッフ14人で60台超の駐車場があるクリニックにとってゾッとするような数字だった。11月は213人、12月が288人。1日の患者数がスタッフの数より少ないような状況が続いた。

開院翌年の1、2月も状況はさほど変わらず。それでも澁谷裕之理事長は楽観的だった。「本イル」が地域から評価され、県内外から注目されている。前述のように開院した月の患者数は100人だった。それが半年後（21年4月）に992人、1年後の21年10月は3，884人、2年後の昨年10月は8，450人になった。

保険収入の対前年同月比を見ると、開業1年後の21年10月が2，009．6%、その1年後の昨年10月が302．2%。エールホームクリニックは、後述する新型コロナのワクチン接種への圧倒的な注力もあり飛躍を遂げた。現在、1日の患者数はおよそ500人だという。

ワクチン接種でも「エールスタイル」

新型コロナのワクチン接種でメディカルビットバレー（MBV）、エールホームクリニックの名は広く知られるようになった。幸か不幸か、MBVは新型コロナの感染拡大と同時にスタートしたようなもの。

21（令和3）年6月から始まったワクチン接種で、クリニック全体の接種回数は現在までで21万回、澁谷裕之理事長だけで5万回を超えているという。正式なデータはないものの、これほどの接種実績がある民間のクリニックは皆無と言われている。

ワクチン接種が始まった当時、「費用は事務経費も含めて1回2，070円」とされた。医療機関にとってはインフルエンザの予防接種よりも利益は上がらず、積極的に接種を実施しようというところはなかなか見当たらなかった。

エールホームクリニックではコロナ禍を「国難とも言える緊急事態」と位置付け、総力戦で迎え撃つ体制を整えた。「ワクチン接種は社会のためになると考えましたし、私たちの初動が早かった。そして決断してからの行動が早かったんです。それを周囲の方々から理解していただき、ワクチン接種でチャンスを与えてもらったのだと思います」（澁谷裕之理事長）

エールホームクリニックの場合、ワクチンはすべて医師が打つ。医師は日常の医療活動も継続して行う。受付や予約、さらに会場の設営に至るまで、外部に委託せず、すべて自前で実施した。

職域接種にも積極的に取り組み、北は村上、阿賀野から南は上越まで、さらに県境を越え群馬県の前橋市でも実施した。昨年3月には3回目の接種を加速するため、長岡市内にある大型ショッピングセンターの一画にワクチン接種専用のサテライト施設、「エールワクチンセンター」を自前で設置した。

エールホームクリニックを含む医療関係者らの努力があって、新潟は一定の人口当たりで新型コロナによる死者数が最も少ない県になった。そしてコロナは感染症法上の「5類」に移行した。「大変だったけど成長することができました。一つのステージは終わったのではないかと思っています」（同）

「すべて自前」というスタイルは、MBVの企業文化でもある。開院準備が進むエールホームクリニック長岡では、「医療コンサルタントなどを入れず、医療機器や備品に至るまで、すべてスタッフが決めている」（同）という。

▲5月10日、賃貸借契約終了後の記念写真

▲「エールホームクリニック長岡」が開院を予定する「米百俵プレイス北館」の完成予想図（長岡市の報道発表資料より）

2023年6月号〈財界にいがた〉掲載

地域医療を変える

奇妙な話がある。県内の公立病院再編で、「三次救急と高度医療を担う」べく新設された病院が、「なぜか風邪の流行期になると繁盛して、駐車場が満杯になる」という。千客万来はめでたいことだろうが、どこか違ってはいないだろうか。医療機関の役割分担が機能せず、ゆがんだ地域医療の姿になってしまっているのでは…？

これでは医療機関それぞれの個性も、医師のマンパワーも十分に発揮できない。本来は「三次救急と高度医療」を担うべき人材や設備が、風邪ひき患者の対応に追われるようでは宝の持ち腐れだ。

メディカルビットバレー（MBV）は、単なる開業医の個人事業ではなく、「地域医療の在り方を変える」というミッションをも遂行すべく誕生した。以下は澁谷裕之理事長が東証プライムに上場する企業の幹部らに、MBVの内容を伝えるために作成した事前資料から。〈人口5万〜100万人程度の地方都市に、常勤医5〜10名程度の複合クリニックを規模に応じて複数つくることがこれからの医療の世界を変えていきます。

病院は今後、ますます高度化、巨大化、集約化されていきます。病院は当然に、できる限り外来をスリム化したいですし、するべきです。その時の受け皿として、より高度な医療を外来で行うことのできる複合クリニックが必要です〉（事前資料より）

ここで登場する「複合クリニック」がエールホームクリニックであり、10月に開院する「エールホームクリニック長岡」だ。MBVのクリニックでは、「シナジー診療」でも分かるように、医師同士、そして医療スタッフや運営スタッフの間に壁がなく、実にフラットな関係でチームワークがいい。

〈加えて、銀行や県市町村の行政機関、マスコミとも、行動あるのみの精神で強い連携を結んでいます。薬局や薬品メーカー、システムベンダー（情報システムの構築・運用を担当する事業者）をはじめ、様々な業者さんとも壁のない信頼に基づくフラットな関係性を構築しています〉（同）

こうした大型の複合クリニックが「地域医療を変える」という。〈これから壁のない高度な大型複合クリニックの必要性は広がると思います。高度な医療がクリニックでも可能になることがわかれば有能な医師はやり甲斐になり、働き方を選択できるようになります。また、有能な医師が集まれば有能な医療スタッフは自然に集まります。この広がりは、新しい領域ですので可能性は無限大です。

そうすると誰もが必要とする医療ですから経営のプロも集まるはずです。そして、受け皿が充実することで病院はますます、超高度化、超専門化、超巨大化することが可能になります。先端医療はさらに進化することが出来ます。

多くの大型複合クリニックが日本の地域医療の最前線になることで医療全体がボトムアップし、医療の質、機能の向上につながります。日常では大病院に行くより、大型複合クリニックに通院するほうが便利で安心という文化が出来ていきます。機能分化された、新しい医療システムの完成です〉（同）

「エールスタイル」、あるいは「長岡方式」とでも呼ぶべき大型複合クリニックと病院との関係が、地域医療の在り方を変える原動力になる。

医療を起点に株式会社化

エールホームクリニックの経営は安定化した。新型コロナは「5類」に移行し、ワクチン接種にも一定の区切りがついた。エールホームクリニック長岡の開院へ向けた最終的な契約も終了した。メディカルビットバレー（MBV）の澁谷裕之理事長は、「MBVは急成長を遂げた創業期から、安定して緩やかな曲線を描く成長期に移行していく段階に入りつつある」と語っている。

「医療からはじまる街づくり、仕事づくり、人づくり―地域医療を変え、社会を変えていく―」というMBVの試みは、次のステージに向かうようだ。「一つのステージが終わったのではないかと思っています。いよいよこれから、私たちは医療から始めて社会を変えていくというスタイルで、医療法人だけではなく、民間事業に入っていこうと思っています」（澁谷理事長）

前出の「事前資料」の中で、澁谷理事長はこう述べている。〈複合クリニックのニーズは確信しました。次はこの概念を広めたいのです。そのためには、医療法人の枠組みを超えて、株式会社の設立、ホールディングス化が必要だと思っています。

クリニック事業に加えて、スタートアップコンサル事業、地方における医師、看護師、医療事務の教育、人材派遣まで視野に入れています。実際にスタートアップする医療機関を、当法人のもつ医療におけるソフト面のノウハウを用いて支援をしたいのです〉（事前資料より）

社名はメディカルビットバレー株式会社に決まっているが、設立の時期などは未定。「医療法人を株式会社にするわけではなく、あくまで本当の事業として株式会社を作っていこうということです。医療は究極のサービス業です。これまで私たちが築いてきたノウハウやアイデア、そうした発想力を生かした会社を作っていこうと思っています」（同）

医療は誰もが関心のある普遍的な分野だ。それゆえ本来は様々な業種と相性がいいはず。だがこれまで医療の世界は外部から“白い巨塔”のように思われ、極めてとっつきにくかった。一方、MBVとそのクリニックは内部も、そして外部との関係もフラットで壁がない。「自分たちだけでやるというのもいいのですが、地域を盛り上げる、長岡を盛り上げる、長岡のブランド力を向上させたいという思いが非常に強いので、いろんな企業と一緒になってやっていきたいと思っています」（同）

異業種、異分野の技術やアイデア、ノウハウなどを組み合わせ、革新的なビジネスモデルを構築するのがオープンイノベーションだ。MBVと一部企業による取り組みは、実は既に始まっている。

「エッフェル塔みたいだった医療をフラットなものにすることで、いろんな人から一緒にやりたいと言っていただいています。それがまさにオープンイノベーションで、そうするといろんな考え方、いろんなアイデアが出るんです。

医療は独占するより、みんなに向かって開かれたものにする方が社会的な効果が上がるんです。いろんな人の意見を聞いて動くことができるわけですから」（同）

日経新聞に意見広告のインパクト

1月16日の日本経済新聞全国版に、これまで見たことも聞いたこともないような意見広告が掲載された（別掲）。第4面の全面を使ったド迫力の広告で、紙面の右側にある「『医療と経営の分離と融合』で病院経営の可能性を広げる」というタイトルが読者の目に飛び込んでくる。

医療法人メディカルビットバレー、澁谷裕之理事長による意見広告だった。紙面には同理事長や、エールホームクリニックの医師やスタッフらの写真も大きく掲載されている。意見広告の内容は大略以下のよう。

「医療の分野では組織体制の問題で財政破綻する医療機関が、これから数年でさらに増える。医療は社会性の強い分野で、質の高い医療を提供するために黒字経営は必須。病院やクリニックの運営も医師が担う場合が多いが、全体を動かす責任は、医師ではない経営の専門家が担うべき。

『経営は分からないから』とアウトソーシングするのではなく、組織内のメンバーだけで医療と経営の二つを動かすことが大事で、医師でなくてもリーダーシップがあり、時代に即したマネジメントのできる人を入れて、医療と経営を融合する必要がある。

そのためには既成概念や医療業界の常識を突破しなければならない」

こうした意見広告の内容に日経新聞側が共感したためか、4面という異例とも言える配置になったらしい。当日の新聞を開くと、右の頁（4面）がMBVの意見広告、左の頁（5面）は国際面で、その右下には岸田文雄首相の写真と、同首相による記者会見の要旨が掲載してある。MBVの意見広告を同首相や官邸サイドも目を通したのではと思いたくなる。

前出の「事前資料」で、澁谷理事長はこう述べていた。〈医師は医学以外の勉強をあまりしてこない人が多く、またもともと組織を束ねることが苦手な人が多いです。そこで、スタートアップから組織つくり、運営を教えることが重要になります。または、経営のプロと仕事することが当たり前になる必要があります。当クリニックでは開業時から医療と経営部門を分けて、そして仲良くやってきました。医師も運営側も大変良い関係が保たれています。その重要性、必要性を広げることが大切です〉（事前資料より）

「医療の経営においても、フラットで壁のない組織づくりが大切だ」と、澁谷理事長は強調している。〈医療DXとよく聞きますが、本命は電子カルテやAIではなく、あまりに体質が古い医療においては、フラットで壁のない組織体制の構築こそがDXの本流です。そうすることで医療従事者の間でも、いかに人間性が大切であるかを理解し、自分を見つめなおし、切磋琢磨がおこり、医療の質、効率が上がります〉（同）

長岡 圧力釜大作戦！

日経新聞に掲載した意見広告の反響はすさまじかった。「東証プライム市場に上場している企業の創業者である会長から、感動したと連絡をいただいて、すぐにお会いしに行ってきました」（澁谷裕之理事長）

意見広告が掲載されたのは1月16日。その1カ月後の2月20日、澁谷理事長は創業者の会長を含む企業の幹部らのもとへ出向き、自身の思いを伝えた。これまでしばしば引用した同理事長による「事前資料」は、その際に作成されたものだ。この企業の売上高（連結）は約5千億円。既に事業化に向け動き出しているらしい。

「大手銀行の出身で、大手電話会社のヨーロッパ副社長などを歴任した、世界を相手にしてきたスーパーエリートビジネスマンが、日経新聞の意見広告を見て、こんな医療があるなんてと、実際に私どものところへ見に来られたんです。

そしたらその日に、感動した、仲間に加えてくれということになって、東京からIターンで長岡に住んで6月から一緒に働くことになりました。私たちが医療というより、世の中を変える突破口になっていることに共感、共鳴していただいたのだと思います」（同）

長岡市内の大手企業からも事業化に向け声がかかり、既に澁谷理事長が企業の幹部と面談を終えたという。

「長岡を挙げて、有能でやる気のある人が稼げるようにして、人口を増やすというよりも、一人当たり稼ぐことができる単価を上げるまちにしたいと思っています。長岡は夢があって稼げるぞという仕組みを作って、それをほかの都市に売ることができるような、そんな会社を作りたい。それを医療から始めるということに面白さがあると思います」（同）

「長岡は圧力釜のようだ」と、澁谷理事長は言う。このまちには医療とともに圧力釜で煮込むと、とんでもないものに生まれ変わる素材がふんだんにある。圧力釜から生まれた「長岡モデル」を全国モデルに展開し、「いつかIPO（新規株式公開）」というのが、同理事長がイメージするところだ。

医療の分野から“起業”し、医療を変革した先にあるものがようやく見えてきた。

2023年1月16日　日本経済新聞　第4面

「医療と経営の分離と融合」で病院経営の可能性を広げる

画期的な組織運営で地方医療に新風

チームワークが最大のポテンシャル

必要なのは組織経営の強化と進化

澁谷裕之理事長プロフィール

▲1月16日、日本経済新聞4面に掲載された
メディカルビットバレー、澁谷裕之理事長の意見広告

2023年6月号〈財界にいがた〉掲載

走り出せ、夢たち。 BSN

医療法人メディカルビットバレー澁谷裕之理事長が毎月第2土曜出演

日報+BSN HOUSING AVENUE 住まいの広場

365日、家づくり日和。

「そろそろかな？」とふと考える、その気持ちが家づくりの第一歩。
そんなきっかけと出会える場所で、
思いたったその日を家づくり日和に。
「この家いいね」の声とともに、
新しい物語が始まるかもしれません。

月イチ開催!!

無記名で のびのびフリー見学Day!

当日参加OK!

記名なしでモデルハウスをいろいろ見学！お気軽にご参加ください♪

【受付】センターハウス【時間】10:00～16:30(15:30最終受付)
●受付後フリー見学用の参加パスをお渡しします

連動企画 初心者さんにおすすめ！スタートアップガイダンス
中立のハウス・アテンダントが見学をサポート！いつでもお声がけください♪

STEP 1 10分でわかる・展示場のミカタ　STEP 2 1軒目・つきそいサービス

●センターハウスで随時ご案内いたします
(15:45最終案内／12:00～13:00休止)
●個人情報の記入は不要です
●ご参加は希望制です

詳しい開催日は住まいの広場WEBサイトイベントページよりご確認ください

＼＼モデルハウスのスタッフが質問疑問に丁寧にお答えします！／／

個別見学予約

WEBからの個別見学予約でご来場の方に
500円分をプレゼント! オリジナルQUOカード
※初めてのご予約・ご来場時に1棟につき1枚(500円分)さしあげます。
詳しくはコチラ!

12社13棟のモデルハウス＋エクステリア館！

株式会社イシカワ　住友林業株式会社　三井ホーム　日本ハウスHD　セキスイハイム　YAMADA HOMES
一条工務店　SEKISUI HOUSE 積水ハウス　クレバリーホーム　HINOKIYA 桧家住宅　アイ工務店〈NEW OPEN〉　MISAWA ミサワホーム　EXTERIOR工房 庭石館

わが家をつくろう 住まいの広場 日報+BSN HOUSING AVENUE

長岡会場 TEL 0258-89-8482

〒940-2108 長岡市千秋1丁目103-1
●常設・入場無料（年中無休）
●開場時間／午前10時～午後6時
※一部休みのモデルハウスもあります。

イベントに関するお問い合わせ
日報＋BSN住まいの広場イベント事務局
TEL:025-290-7350
受付時間：土日祝日を除く平日10:00～18:00

SNSもチェック!

住まいの広場

省エネ効果と金利引下げ効果でダブルにお得
【フラット35】S(ZEH)

SECOM セコム上信越株式会社 長岡会場のセンターハウスに協賛しています。